

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議(第 57 回)

日時：令和 5 年 10 月 23 日（月）14:00～16:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

会 議 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事

- (1) 西之丸展示収蔵施設周辺の整備について <資料 1>
- (2) 水堀の活用（舟運）について <資料 2>
- (3) 園路改修計画について <資料 3>
- (4) 植栽管理計画について <資料 4>

4 その他

5 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（第57回） 出席者名簿

日時：令和5年10月23日（月）14:00～16:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

■ 構成員

（敬称略）

氏名	所属	備考
瀬口 哲夫	名古屋市立大学名誉教授	座長
丸山 宏	名城大学名誉教授	副座長
赤羽 一郎	前名古屋市文化財調査委員会委員長・ 元愛知淑徳大学非常勤講師	
小濱 芳朗	名古屋市立大学名誉教授	
麓 和善	名古屋工業大学名誉教授	
三浦 正幸	広島大学名誉教授	
藤井 譲治	京都大学名誉教授	

■ オブザーバー

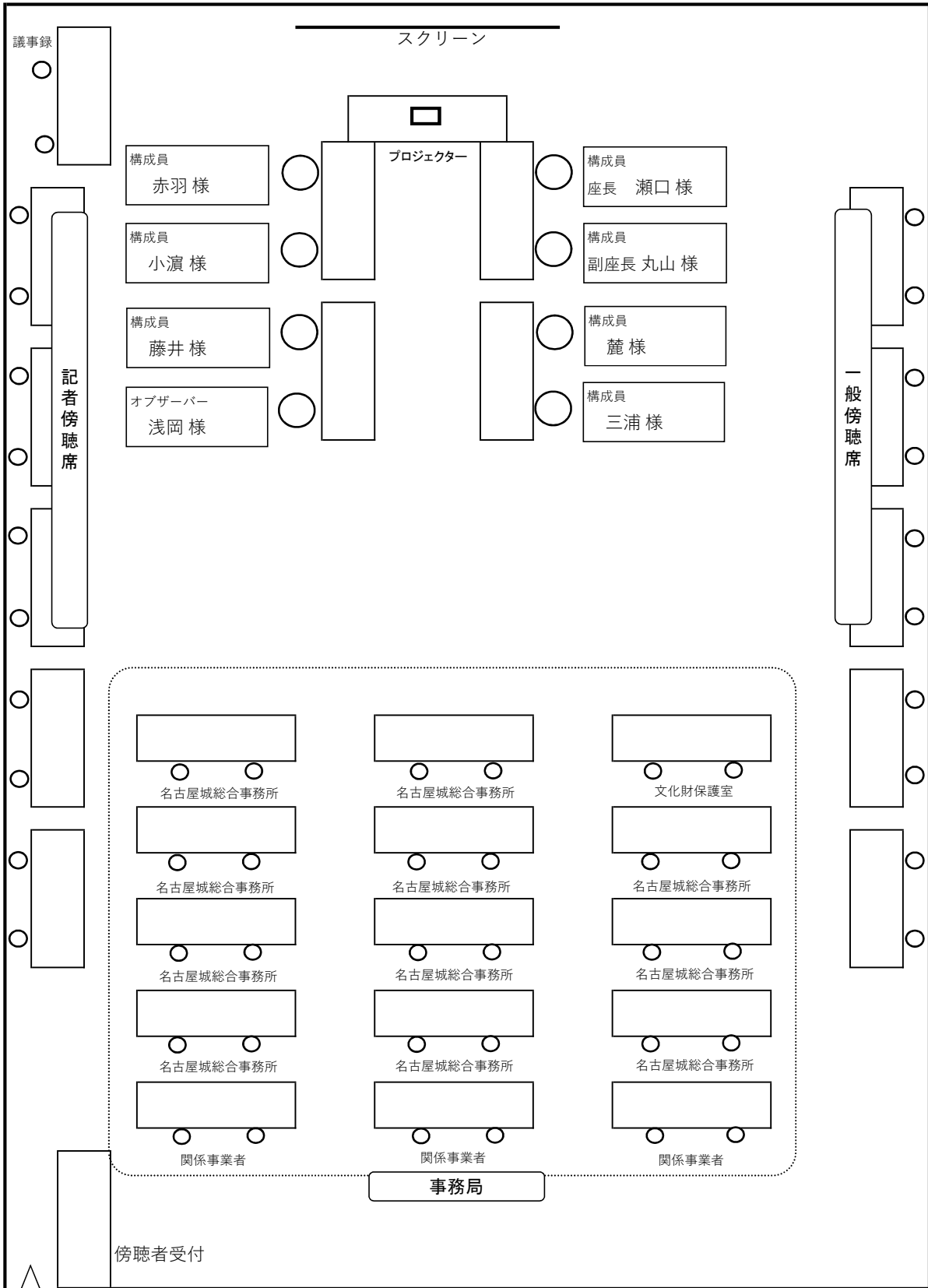
（敬称略）

氏名	所属
渋谷 啓一 （リモート）	文化庁文化財第二課主任文化財調査官
平澤 毅 （リモート）	文化庁文化財第二課主任文化財調査官
浅岡 宏司	愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室主査

第57回特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議

座席表

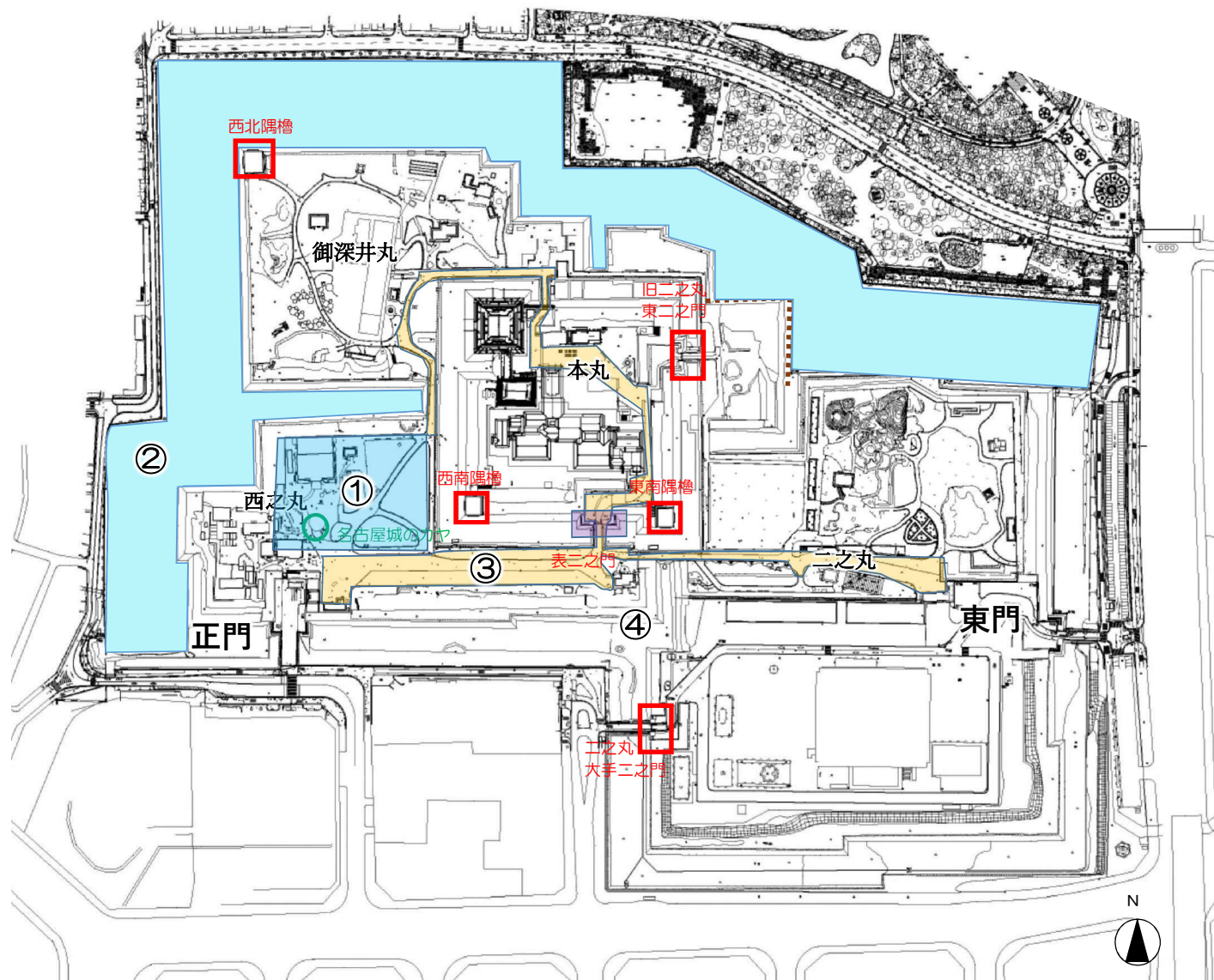
令和5年10月23日（月）
14:00～16:00
名古屋能楽堂 会議室



第57回全体整備検討会議 議題位置図

議事

- ① 西之丸展示収蔵施設周辺の整備
「発掘調査結果等を踏まえた修景（素案）」
- ② 水堀の活用（舟運）について
「事業概要、今後の進め方」
- ③ 園路改修計画について
「事業概要及び景観の検討」
- ④ 植栽管理計画について（城内全域）
「植栽現況調査結果の概要報告」



重要文化財

天然記念物

西之丸展示収蔵施設周辺の整備について

1. 西之丸北部エリアの整備の考え方

(1) 遺構表示と緑を共存する場合

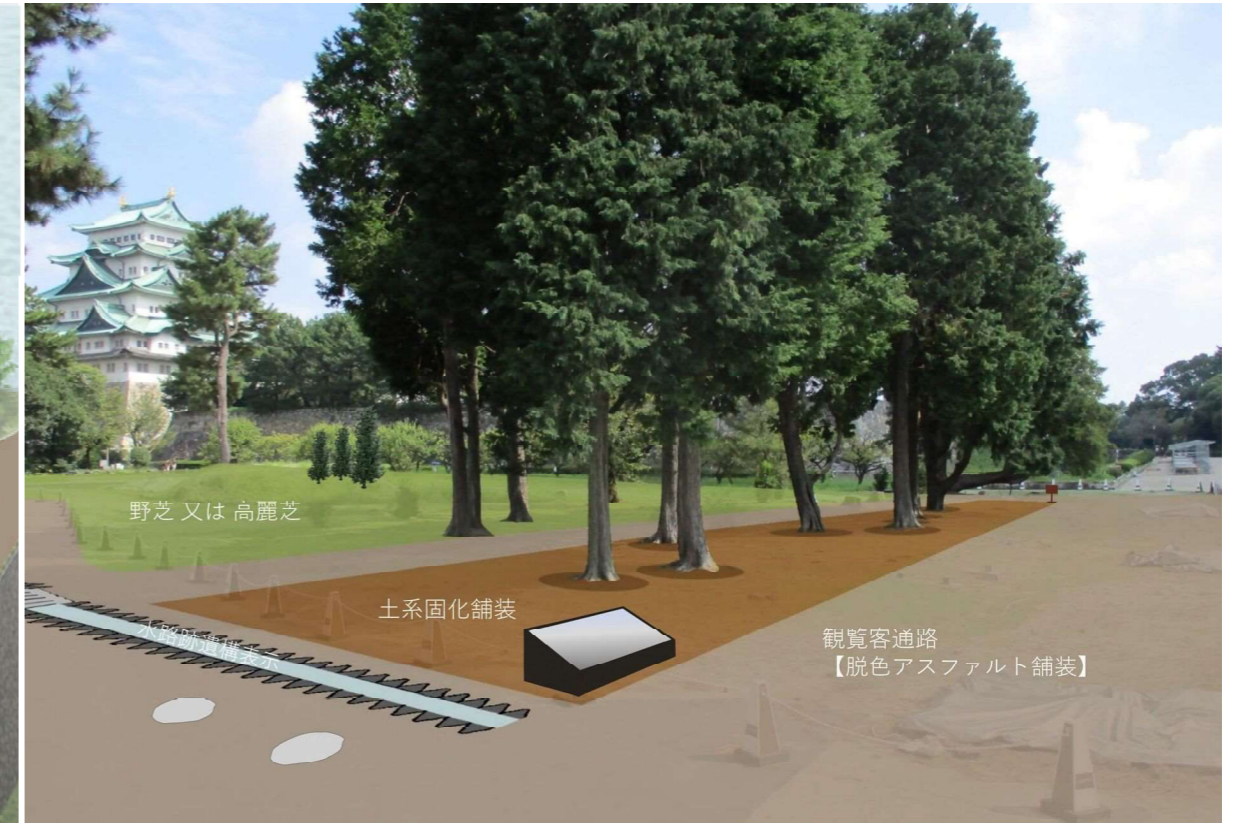
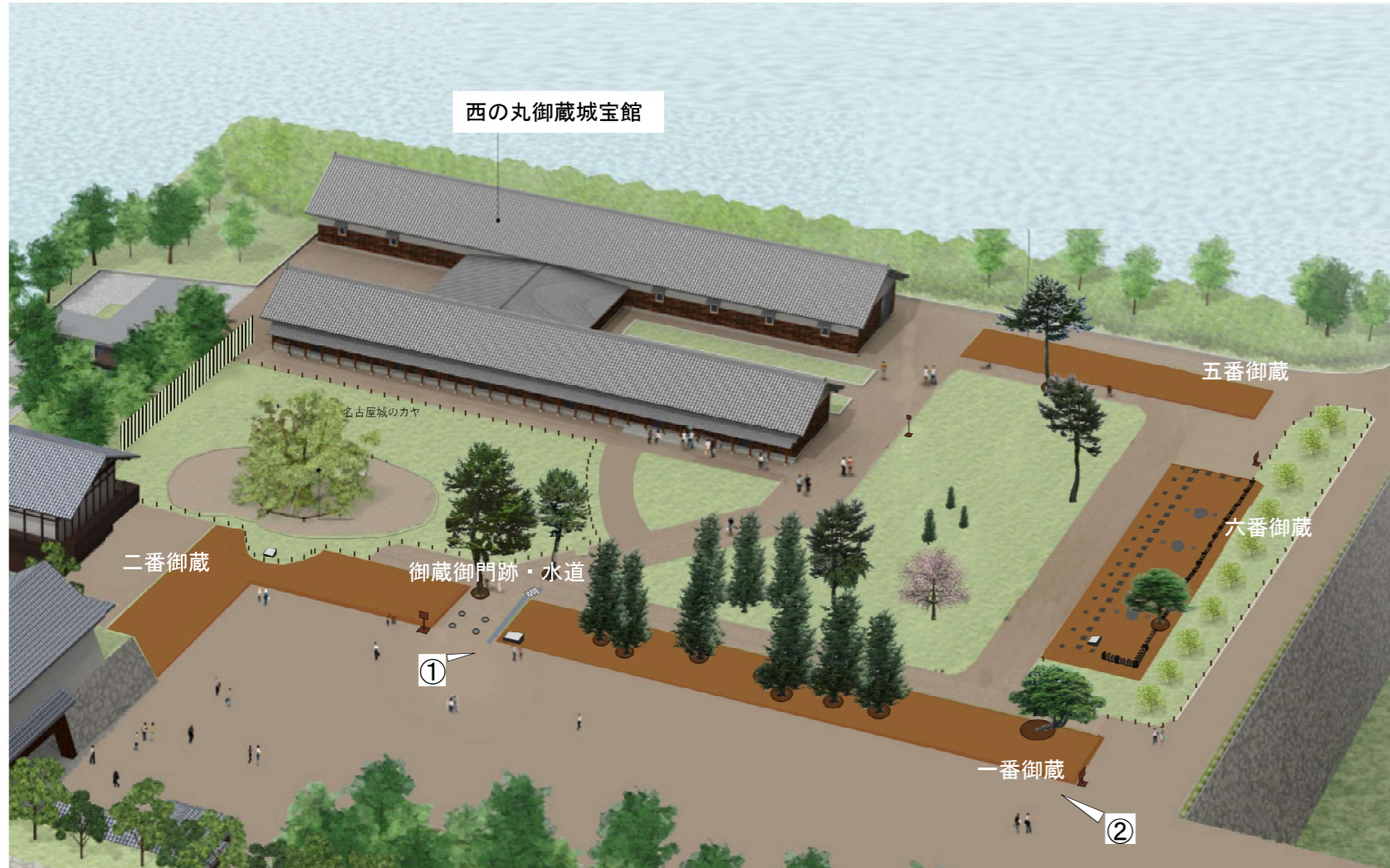


図2 一番御蔵近景イメージ (①南西から) 遺構表示と緑の共存の場合 (保全型)



図3 一番御蔵近景イメージ (②南東から) 遺構表示と緑の共存の場合 (保全型)

- 【整備概要】
- ア. 遺構表示
 - ・六番御蔵、水道、御蔵御門跡：石材（礎石、地覆石）、真砂土固化舗装、アルミ製エッジ材
 - ・一番御蔵、五番御蔵：真砂土固化舗装、アルミ製エッジ材
 - ・二番御蔵：着色アスファルト舗装、アルミ製エッジ材
 - ・説明板
 - イ. 植栽関連
 - ・芝
 - ・樹木保護（ロープ柵、根囲保護材）
 - ・移植（防根シート共）
 - ウ. その他
 - ・園路舗装（脱色アスファルト）
 - ・集水枳・側溝 ※既掘箇所に限る
 - ・案内板 ※基礎なし

図1 全体イメージ 遺構表示と緑の共存の場合 (保全型)

(2) 遺構表示最優先の場合

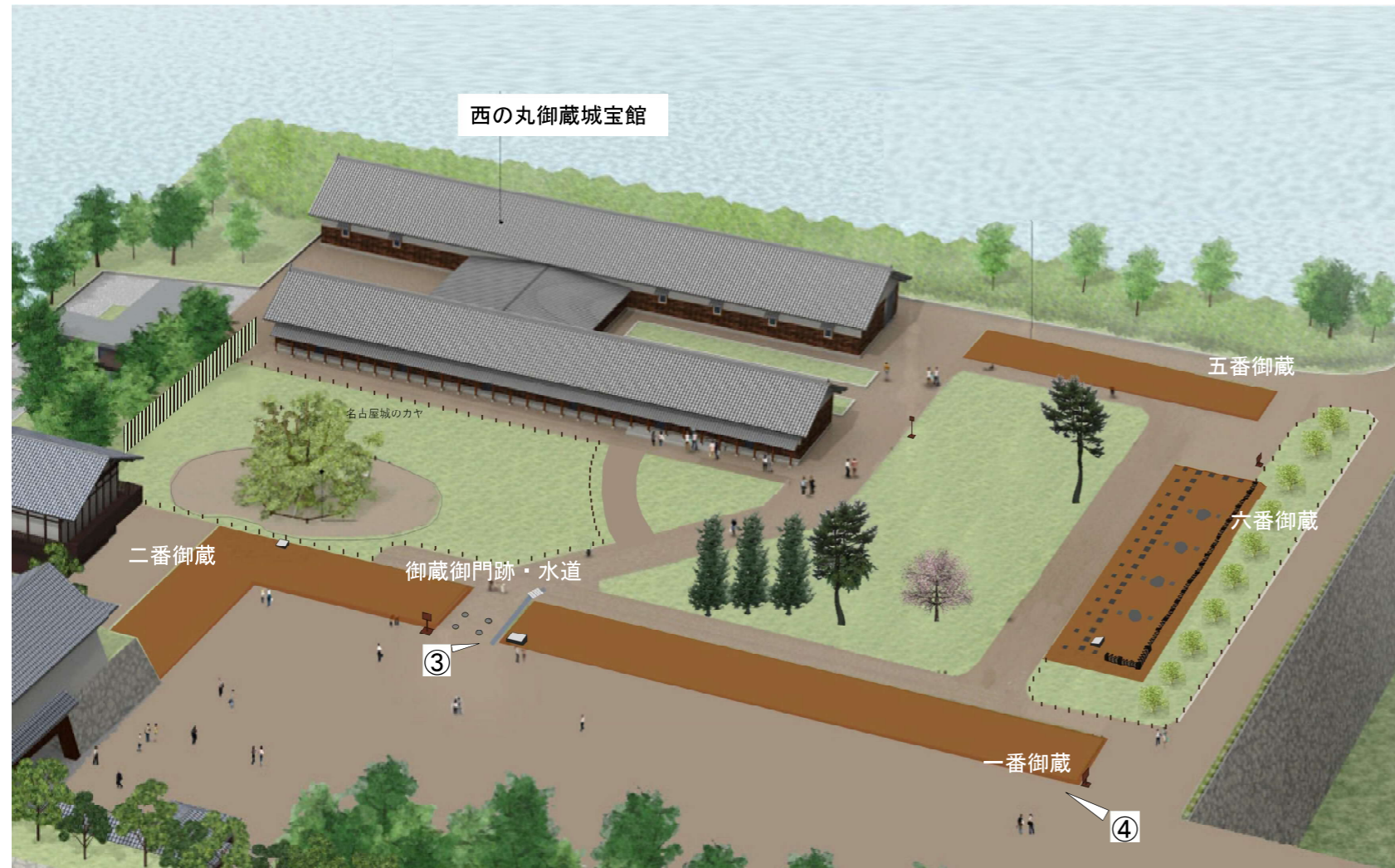


図4 全体イメージ 遺構表示最優先の場合

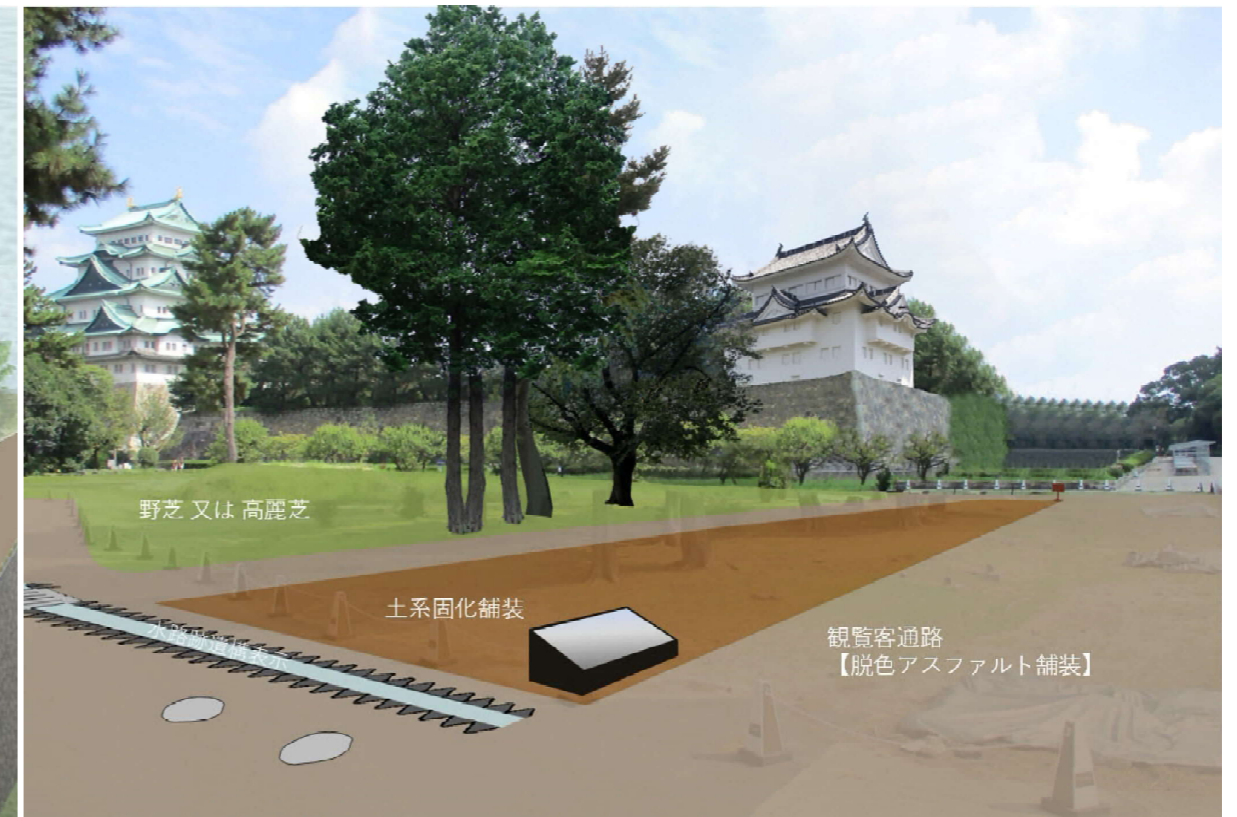


図5 一番御蔵近景イメージ (③南西から) 遺構表示最優先の場合



図6 一番御蔵近景イメージ (④南東から) 遺構表示最優先の場合

【整備概要】

ア. 遺構表示

- ・六番御蔵、水道、御蔵御門跡：石材（礎石、地覆石）、真砂土固化舗装、アルミ製エッジ材
- ・一番御蔵、五番御蔵：真砂土固化舗装、アルミ製エッジ材
- ・二番御蔵：着色アスファルト舗装、アルミ製エッジ材
- ・説明板

イ. 植栽関連

- ・芝
- ・樹木保護（ロープ柵）

ウ. その他

- ・園路舗装（脱色アスファルト）
- ・集水枿・側溝 ※既掘箇所に限る
- ・案内板 ※基礎なし

2. 整備内容

(1) 全体

- ・盛土し、遺構との間に原則 30 cm の保護層を確保

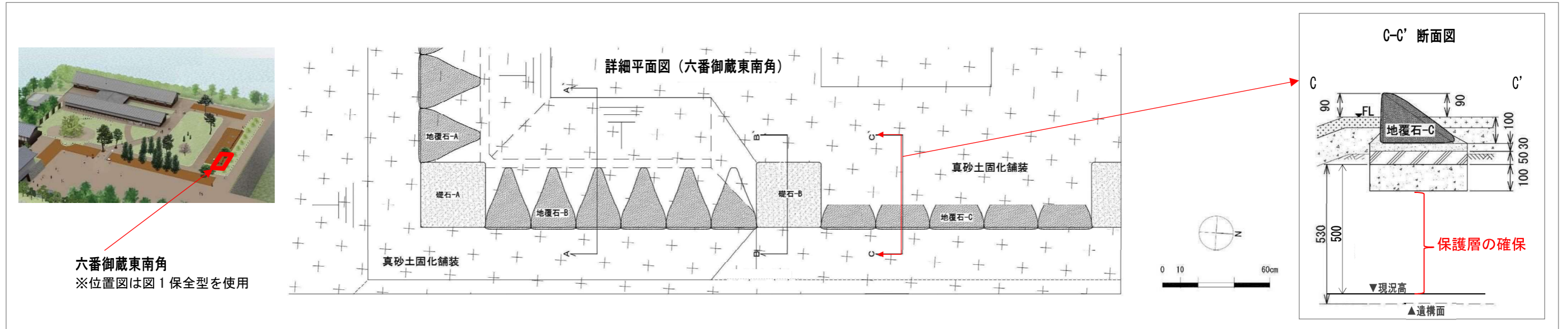


図7 保護層（例：六番御蔵東南）

(2) 遺構表示

- ・検出した礎石等に近い形状や種類で推定した建物位置に表示
- ・説明板、パンフレットによる解説等

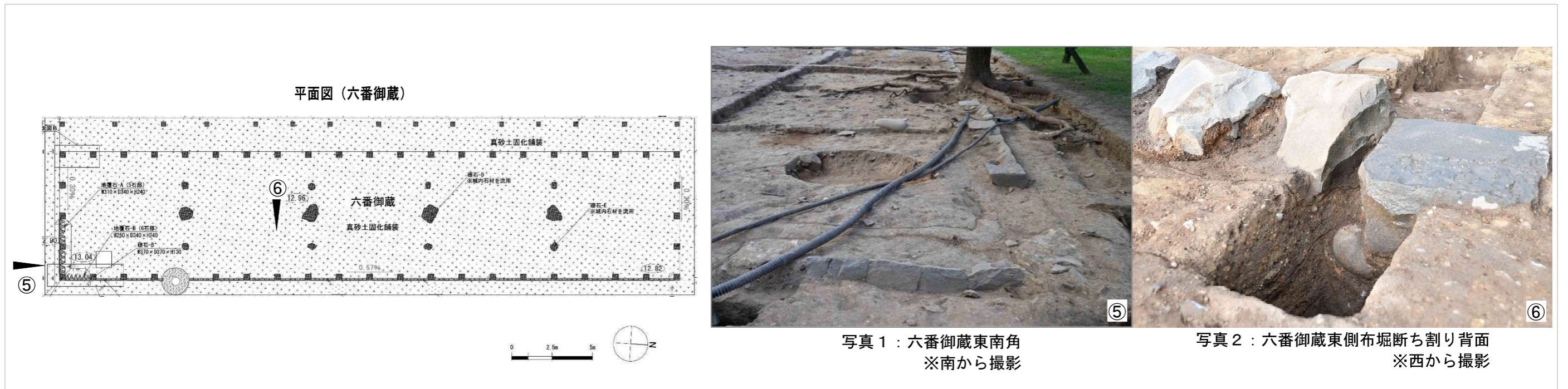


図8 遺構と平面表示の整備内容事例

- ・遺構表示については、来場者が遺構をより理解できるように、園路からの観覧に加え、平面表示内に入って米蔵の規模を体感したり、表示を間近にみて実感したりすることを目指し、平面表示と園路を同じ高さとする検討をした。
- ・六番御蔵の遺構表示については、検出遺構にできるだけ近い形で表示するため、地覆石は9cm、礎石は3cm（中央礎石の4石は18cm）蔵跡表示の舗装面よりも突出する。また、南東部分は蔵跡表示の舗装面を下げて地覆石等の全形が見えるようにしている。六番御蔵を除く遺構表示については、真砂土固化舗装、地覆石等を園路と同じ高さとしている。

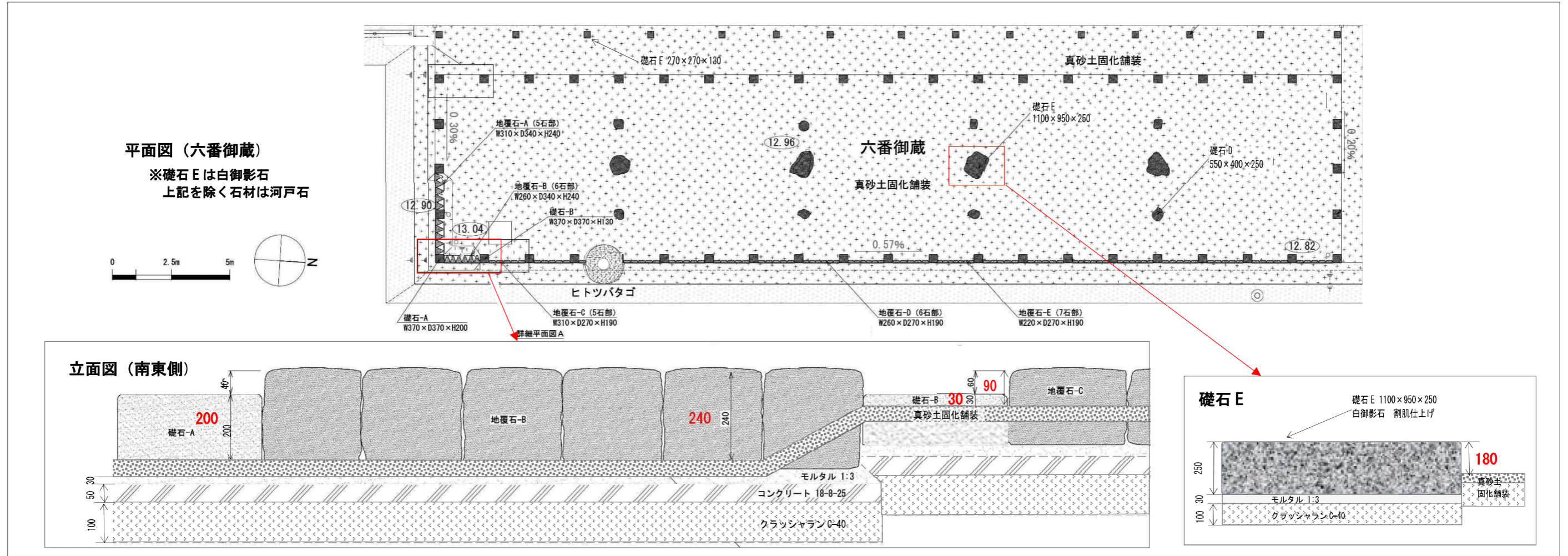


図9 六番御蔵整備内容

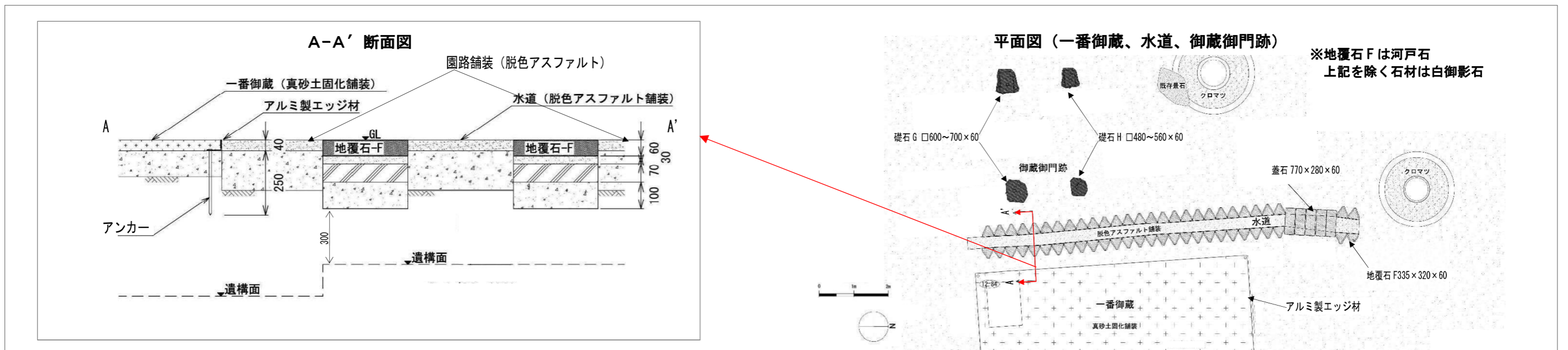


図10 一番御蔵、水道及び御蔵御門跡整備内容

(3) サイン計画

事項	規格(mm)/材質	内容	図・写真等
説明板： エリア及び調査結果概要、カヤについて2言語の解説			
① 板面 1,200×900 t3.0 SUSプレート	「西之丸の米蔵と御蔵構」 ▶西之丸北部の歴史 ▷江戸時代の御蔵構え ▷大正の取り壊し ▶発掘調査の成果と整備 ▷一番御蔵、二番御蔵、五番御蔵、 六番御蔵、御蔵御門(礎石)、 水道の発掘調査成果・文献資料 を基にした表示 ▷三番御蔵、四番御蔵の建物の 外観の再現	<ul style="list-style-type: none"> 西之丸現況図 金城温古録 第28之冊 「御蔵構大体」 	
② 板面 900×900 t3.0 SUSプレート	「六番御蔵」 ▶六番御蔵の歴史 ▷金城温古録による建設年代 ▶発掘調査の成果 ▷建物位置と礎石配列 ▷庇と戸前の位置 ▶六番御蔵の整備 ▷礎石・地覆石の再現	<ul style="list-style-type: none"> 発掘調査の切り写真 礎石・地覆石の検出写真 	
③ 板面 900×900 t3.0 SUSプレート	「天然記念物名古屋城のカヤ」 ▶カヤの植物学的特徴 ▶カヤの歴史 ▷「金城温古録」記載の由緒 ▷国天然記念物指定(昭和7年) ▷戦争による被災	<ul style="list-style-type: none"> 戦災で焼けたカヤの写真 カヤの実の写真 	
案内板： 既存案内板等の規格や位置等を踏まえ2言語の案内、基礎無し			
④⑤ 板面 600×600 (高さ 1650) SUS 焼付塗装	誘導案内 (西の丸御蔵城宝館、梅林)	(既存にあわせる)	
⑥ 板面 900×600 (高さ 1250) SUS 焼付塗装	誘導案内(東門等)	(既存にあわせる)	
⑦ 板面 240×240 (高さ 1400) SUS 焼付塗装	誘導案内(エリア内トイレ)	(既存にあわせる)	

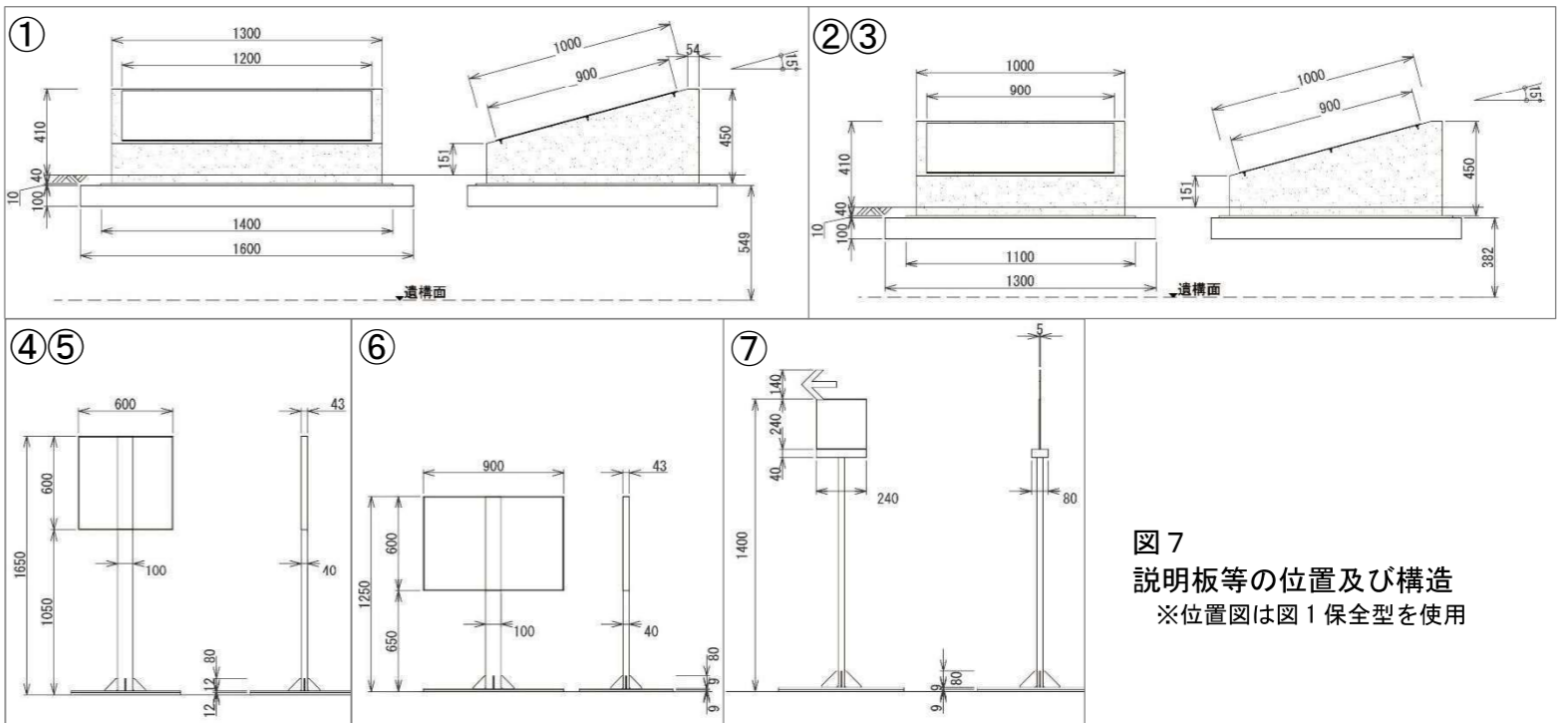
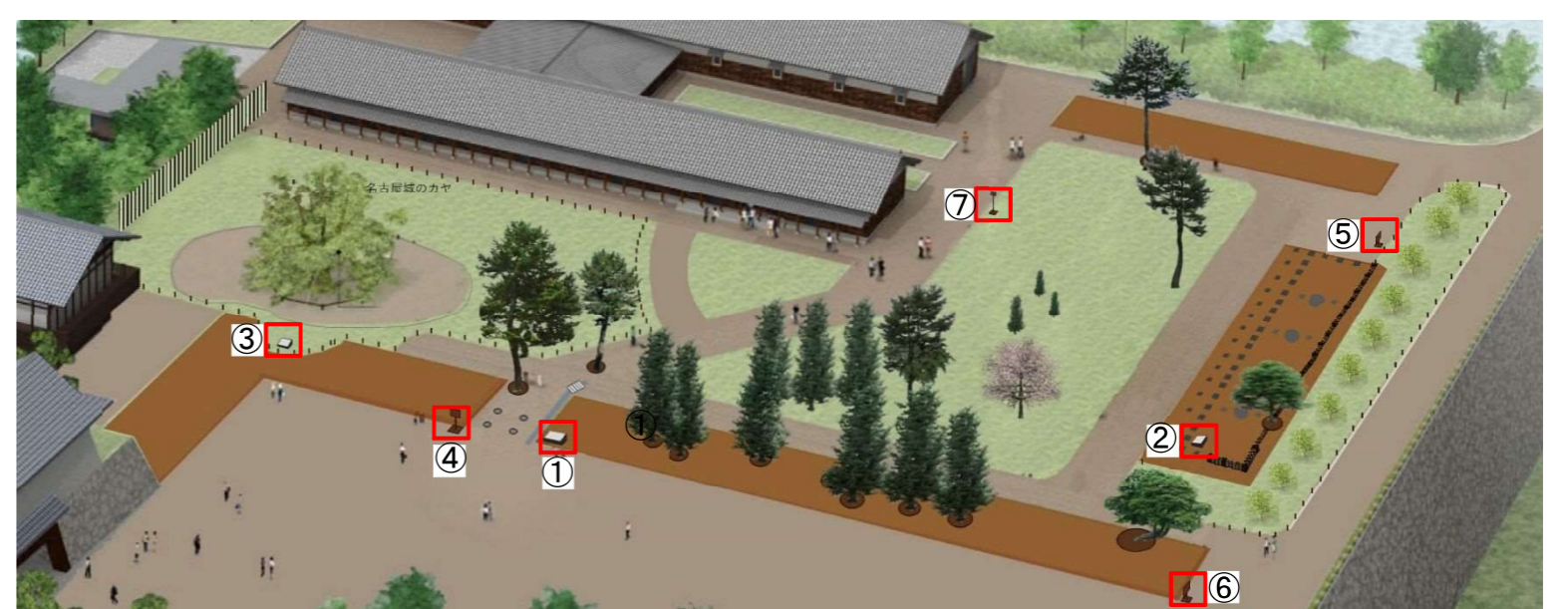


図7
説明板等の位置及び構造
※位置図は図1保全型を使用



写真3
参考 既存案内板

水堀の活用（舟運）について

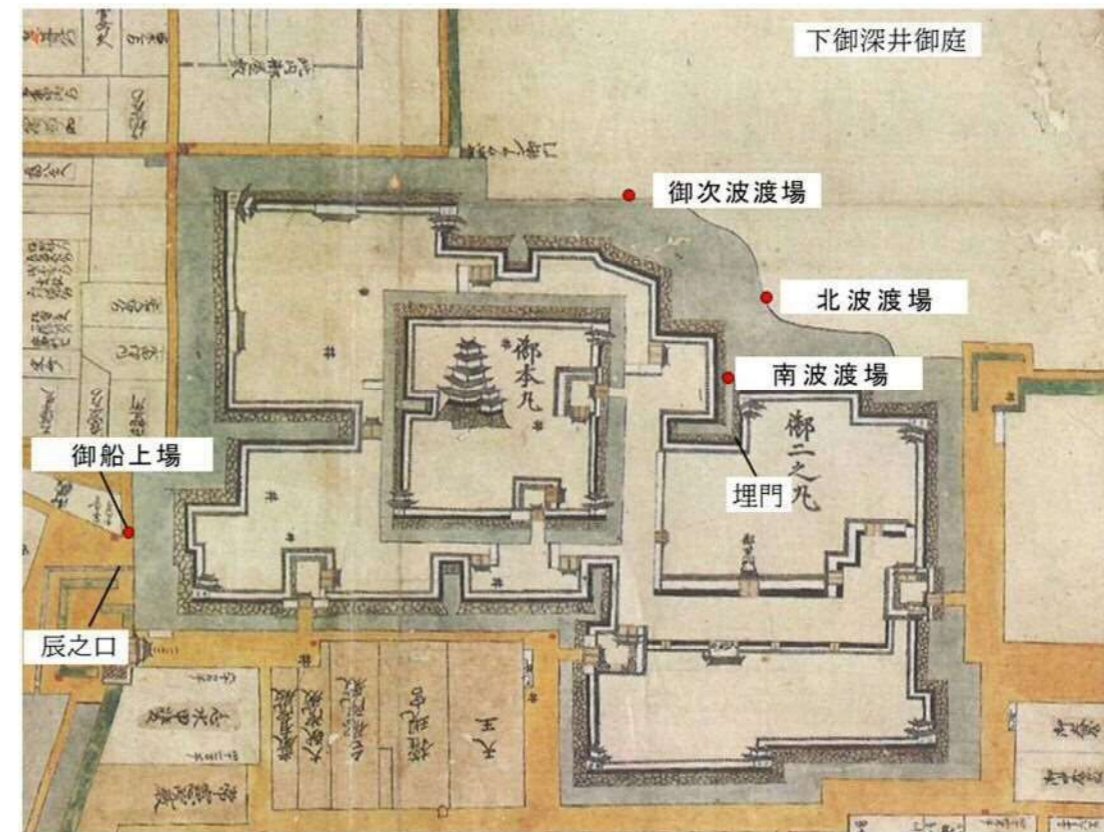
1 水堀の活用（舟運）の概要

(1) 趣旨

- ・近世期の城郭では、広大な面積を有し、高石垣を備える水堀が多く見られる。こうした水堀は、遊興の空間、物流や交通、城下町の治水、貯水池など、防御以外にも多面的な機能を有しており、水堀に光をあてることを通じて、新たな視点から城郭の魅力や意義を伝えることが可能となる。
- ・名古屋城の水堀は築城当時の姿をほぼ留め、水堀に関連する江戸期の遺構（以下、「水堀関連遺構」という。）も残存している。水堀には高石垣がめぐり、その上にはかつて月見櫓等の諸施設が、北側には下御深井御庭が広がるなど、一体的な空間を構成していた。現在でも、水堀の水面からは、10mを超える高さの石垣や重要文化財の西北隅櫓を臨むことができる。
- ・江戸時代の名古屋城の水堀は、舟の運航をはじめとしてさまざまな場面で活用されていた。引き続き、水堀及び水堀関連遺構（以下、「水堀等」という。）について文献等の史料調査をはじめとした総合的な調査を進めるとともに、このような歴史的事実をふまえた舟を運航することで、水堀等への理解促進や文化財保護意識の向上、名古屋城の魅力向上を図る。

(2) 名古屋城水堀の概要

- ・名古屋城の水堀は、城郭の北側（御深井丸及び二之丸）及び西側（御深井丸及び西之丸）に広がり、「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」において名古屋城の本質的価値を構成する諸要素の一つに位置付けられている。
- ・御深井丸及び西之丸の周囲の水堀は、名古屋城普請が開始された慶長 15 年（1610）、堀・石垣と同時期に完成したと考えられる。当初、北岸の東側部分（二之丸北側）は護岸がなされず、自然湧水の御蓮池と水面がつながっていた。その後、湧水の減少を補うため、庄内川から御用水が引かれ、排水施設として寛文 3 年（1663）には辰之口が設置された。
- ・江戸時代には、下御深井御庭での遊興の際の往復や上使の接待、藩主の巡行の際の経路としての利用や、非常時の脱出経路としての位置付けなど、さまざまな場面で水堀が活用され、舟が運航されていた。舟運に関連する施設としては、南波渡場、北波渡場、御次波渡場、御船蔵などが水堀に面して存在していた。



<凡例> ● 舟運関連施設（※御船蔵は未記載）

図 1 舟運関連施設位置図（『尾府名古屋図』（名古屋市蓬左文庫蔵）に一部加筆）

(3) 課題

- ・水堀関連遺構について、位置や残存状況等が十分に把握できておらず、総合的な調査を行う必要がある。
- ・水堀等の理解促進を目的とした舟運について、水堀等の現況などをふまえ、どのような運航が可能か検討する必要がある。

<参考文献等>

- 『金城温古録』（名古屋市蓬左文庫発行「名古屋叢書続編」所収）
- 『御小納戸日記』（徳川林政史研究所蔵）、『尾張名所図会』、
- 正保 4 年（1647）名古屋城図（徳川美術館蔵）
- 正徳 4 年（1714）尾府名古屋図（名古屋市蓬左文庫蔵）
- 文政元年（1818）名古屋城下図（名古屋市博物館蔵）

2 今後の進め方

(1) 現状と当面の方向性

<調査研究等>

現状

- ・遺構が現存する南波渡場周辺では、搦手馬出周辺石垣の積み直し工事に着手しており、発掘調査を行う時期等について検討が必要。
- ・水堀に面して存在した北波渡場、御次波渡場、御船蔵などは、現在視認できる形で遺構は残っておらず、遺構の位置や地下遺構の残存の有無等は判明していない。

方向性

- ・辰之口などの現存する遺構においては、発掘調査について検討、実施する。また、残存状況が把握できていない遺構については、文献等の史料調査をすすめるとともに、発掘調査の可能性を検討する。
- ・水堀等に対する理解促進、文化財保護意識の向上を図るため、事業の進捗にあわせて、市民を対象とした講演会、シンポジウム、発掘調査現地説明会などを適宜実施する。

<舟運事業>

現状

- ・水堀の排水施設であった辰之口には遺構が現存しており、観覧できる状態にある。また、辰之口の東側には、平成 10（1998）年度に実施された護岸改修工事の際に埋立地が設置され、残存している。
- ・石垣付近等の浅瀬において堀底に転石などがある可能性があり、舟の運航に必要な水深を確保できる場所が正確に把握できていない。なお、搦手馬出周辺石垣の積み直し工事に伴い水堀の水位を下げていることから、当面の間水堀の北東側では舟を運航するために必要な水深が確保できない。

方向性

- ・当面は、主に水堀の西北側エリアを運航する舟運事業を検討するための社会実験を行い、必要な船着場の仕様や具体的な運航経路等を調査する。それらの結果に加え調査研究等の成果も含めた事業計画を取りまとめる。なお、船着場については、史跡や堀底への影響を最低限に留めた整備となるよう、辰之口の東側に位置する埋立地を候補地として活用を検討する。

- ・将来的には、調査等の成果をふまえ、往時の船着場の再現も視野に入れながら、水堀の北東側を含めた運航エリアの拡張等、さらなる充実に向け検討を行う。

表 1 当面の想定スケジュール

年度		令和 5 年度 (2023年度)	令和 6 年度 (2024年度)	令和 7 年度 (2025年度)	令和 8 年度以降 (2026年度以降)
調査研究等	水堀関連遺構の文献等の史料調査			→	
	水堀関連遺構の発掘調査				→
	水堀等に関するシンポジウム等		適宜実施	→	
舟運事業	舟運に関する計画作成等		計画の取りまとめ ★社会実験	→	★運航開始
	運航エリア拡張等の検討				→



図 2 埋立地（北側から撮影）



図 3 埋立地（東側から撮影）

<辰之口東側に位置する埋立地>
平成 10（1998）年度に実施された外堀護岸改修工事の際に設置された（幅 12.5m×奥行き 2.5m）。鋼矢板（長さ：4 m）で囲い、土を埋戻し、上部にコンクリート（厚さ：10 cm）を打設したもの

(2) 今年度の予定

< 講演会等 >

- ・水堀等に対する理解促進、文化財保護意識の向上を目的とした講演会等を検討
(名古屋城の水堀等の現況、他城郭の水堀等について)

< 社会実験 >

- ・舟運の計画(経路、所要時間、便数、船着場や舟の形状・規模等)の参考とするため、舟運の社会実験を実施

実施日数：3日間程度

内 容：運航経路からの眺望や見どころの検証、参加者への意見聴取などを行う

水堀における舟運についてのこれまでの経緯

水堀における舟運について、これまでの検討状況は以下のとおり。

年 度	内 容
令和 3 年度	《 第 47 回全体整備検討会議（3月） 》 ・水堀における舟運事業概要
令和 4 年度	《 第 49 回全体整備検討会議（5月） 》 《 第 49 回石垣・埋蔵文化財部会（5月） 》 ・水堀の概要：近世の水堀の状況、船着場候補地周辺の遺構、 水堀の現況など ・水堀における舟運の概要：内容、運航経路案など ・ボーリング調査：調査場所、概要 《 第 50 回石垣・埋蔵文化財部会（7月） 》 《 第 51 回全体整備検討会議（8月） 》 ・水堀における舟運の概要：趣旨、内容（案） ・ボーリング調査：目的、調査場所、概要 <ボーリング調査> ・現状変更許可（9月） ・調査実施（1月）

名古屋城水堀の概要 ※第 51 回全体整備検討会議配布資料（抜粋）

1 近世の水堀の状況

(1) 近世における水堀の変遷

・慶長 15 年(1610) 水堀の完成

名古屋城普請が始まり、この年堀・石垣が完成した。御深井丸西・北の水堀も当時完成したと思われる。ただし水堀の北岸のうち、東側は護岸がなされず、御蓮池と水面がつながっていた。東側の護岸については、明治 25 年(1892)頃北練兵場(現名城公園)ができた際、初めて護岸がなされたと考えられる。水源は雨水と熱田台地からの湧水のみで、辰ノ口のような排水施設はなかった。水堀が所定の水位になるには、数年を要したと思われる。

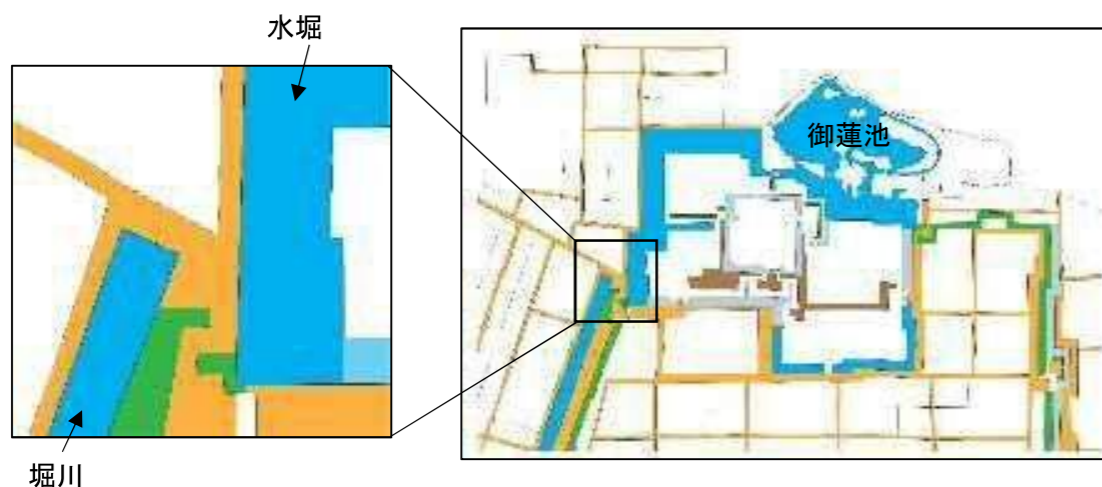
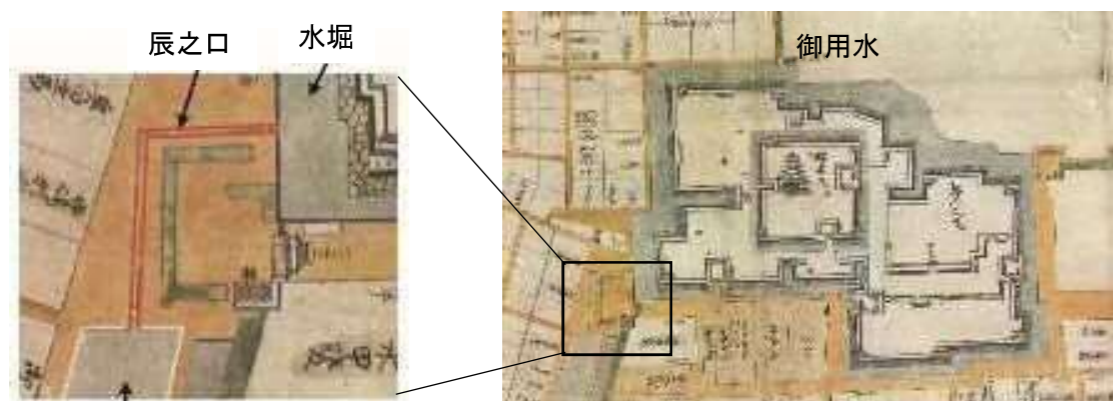


図 1 正保四年(1647)名古屋城図(徳川美術館蔵をトレース)

・寛文 3 年(1663) 辰之口の設置

名古屋城下には藩士の屋敷だけでなく、清州越により多くの商人・職人が移住した。江戸時代前期から城下町が拡大していき、熱田台地の地下水の利用が増えた。そのため台地からの湧水が減り、水堀や御蓮池の水が不足するようになった。この年、春日井郡川村(現守山区)から庄内川の水を御蓮池や水堀に引き入れるため御用水が引かれた。当初、御用水はいったん矢田川に流れ、取水していたが、延宝 4 年(1676)、矢田川の下をくぐる伏越となった。御用水により水堀の水不足は解消されたが、大雨などで水位が高くなり過ぎるのを防ぐため、排水施設が必要になっ



堀川 図 2 正徳 4 年(1714)尾府名古屋図(名古屋市蓬左文庫蔵)

た。これが辰之口である。辰之口の排水路はいったん西へ向かい、すぐに 90 度南に折れて堀川の北端につながった。

・天明 5 年(1785) 辰之口流路の変更

当時、熱田台地と矢田川の間には東から西へ大幸川が流れ、笈瀬川に接続していた。大幸川は大雨のたびに田畑にあふれていたため、天明 4 年に笈瀬川から切り離し、堀川に付け替える工事が始まった。この結果、大幸川は下御深井御庭(現名城公園)や西側水堀の少し西を通ることになった。このルートは明治になって堀川を延長したルートとほぼ重なる。辰ノ口の水路も 90 度南に折れる必要がなく、まっすぐ西に向かい、新しい大幸川に注ぐようになった。

なお、現在水堀の排水は水堀北西角の樋ノ口で行っている。

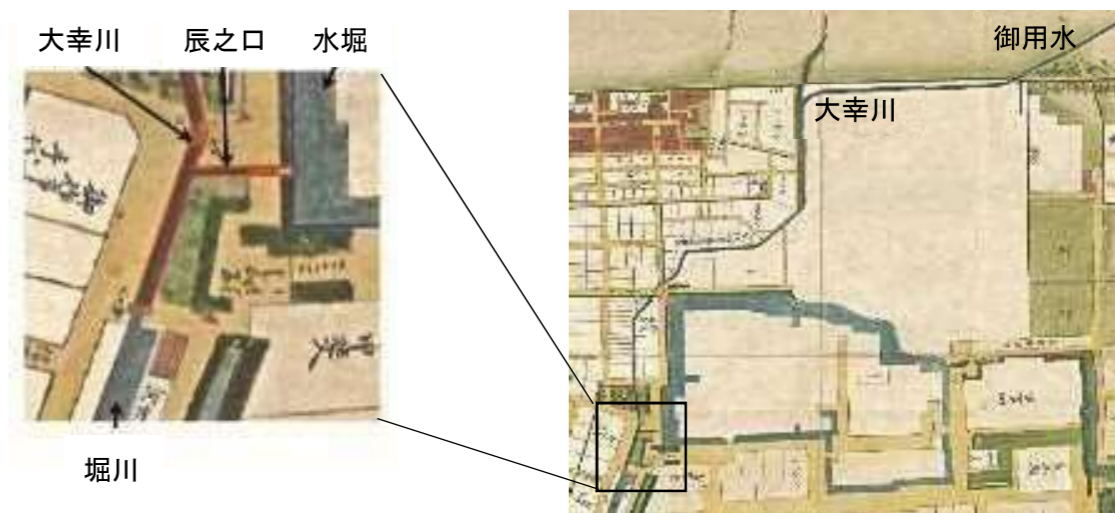


図 3 文政元年(1818)名古屋城下図(名古屋博物館蔵)

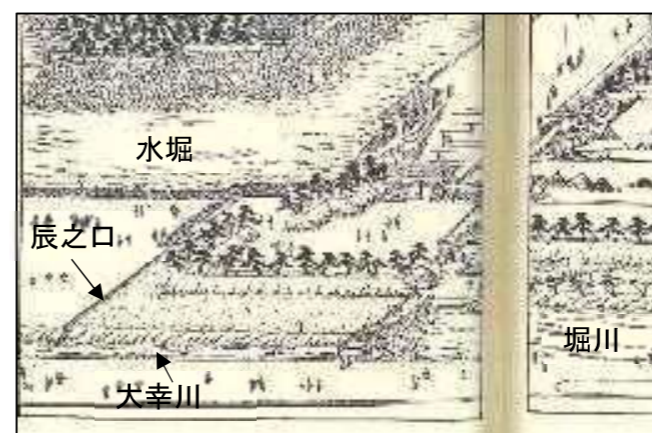


図 4 『尾張名所図会』に描かれた辰之口

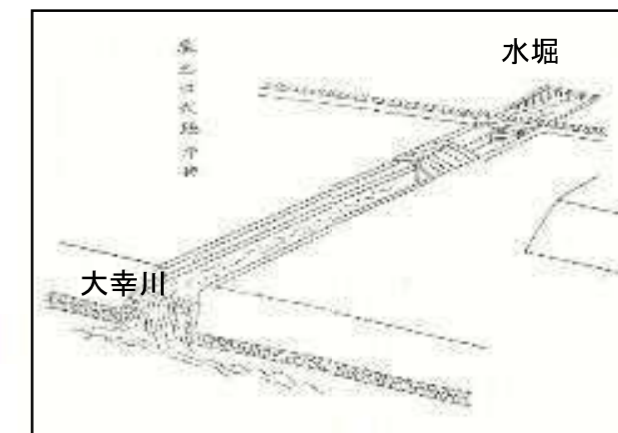


図 5 『金城温古録』に描かれた辰之口

(2) 船着場周辺の遺構

・辰之口水道大樋

船着き場設置予定地点西側に辰之口水道大樋の一部が残存する。

樋の構造は、『金城温古録』に「樋の両側、石組、底共に南蛮た々き」との記載があり、現存する遺構も樋の前面、側面は石組となっている。石組には切石が使用されているが、一部には割石

が使用されているため(図 11)、樋の設置後に改修された可能性がある。ただし、その時期は不明である。石組の目地にモルタル等は視認できない。

底の「南蛮たつき」については人工地盤が設置され確認できないが、当時の施工写真にはたたきのような面が確認できる(図 6)。平成 10 年の護岸施工時の資料を確認する限りではこのたたき面の取り壊しを行っていないことから、人工地盤下にたたき面が残されている可能性がある。

辰之口の規模は、「巾九尺、総長三十間五尺」とされ、幅については現存遺構の実測値(約 2.62m)と類似する。総延長については、樋の東側が土嚢で塞がれているため確認できない。現在目視で確認できるのは約 6.5m である。

その他の構造物として、辰之口の水路を渡る石橋がある。石橋は、『尾張名所図会』、『金城温古録』に描かれているように(図 4、5)、外堀から数 m 西方にあった。描かれた石橋の構造は、長方形の石材を並べ、支柱で支えたもので、現在も類似した構造の石橋が 2 基確認できる(図 7、11)。ただし、東側の石橋はドリルによる穿孔痕が残るため、近・現代に設置された可能性がある。



図 6 辰之口底のたたき面(平成 10 年撮影)



図 7 辰之口の石橋(西側)

・外堀外縁の石垣

平成 10 年度に実施された辰之口南側の護岸工事以前、同地点には石垣が存在した(図 8)。石垣の築石は方形が大半で、積み方は布積みに近い。その大半は平成 10 年の護岸工事の際に破壊されたが、辰之口南側より 2.2m の範囲で一部が残存する(図 9、図 11)。これらの設置時期については、詳細な時期は不明である。

近世の水堀外縁部には、『尾張名所図会』に石垣状の構造物が確認されることから(図 10)、石



図 8 辰之口南側の石垣(平成 10 年撮影)

垣状の構造物が存在したと推測されるが、その規模、築造および廃絶の時期については不明である。



図 9 現存する辰之口南側の石垣

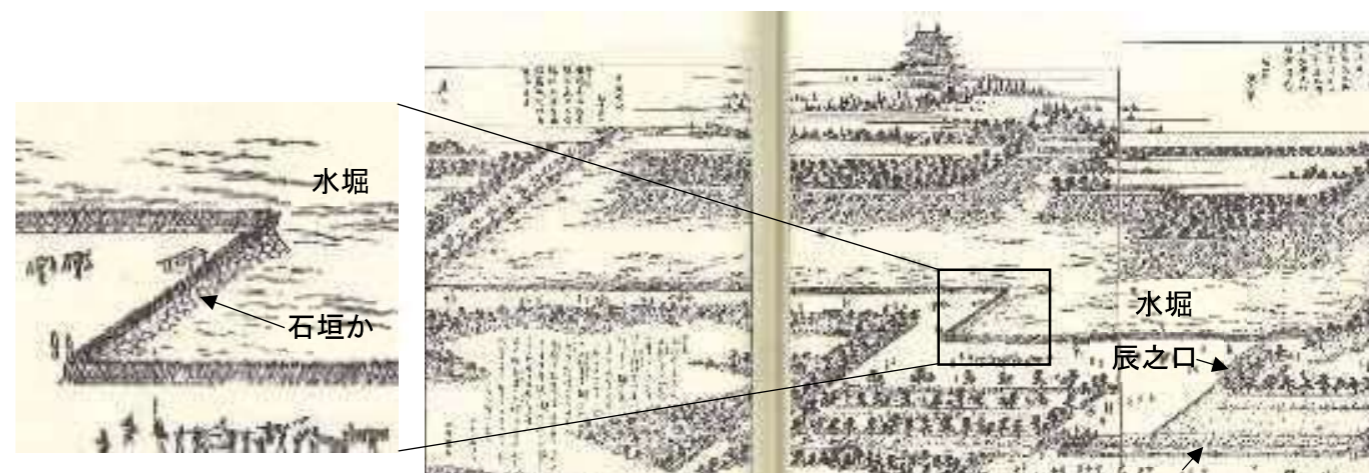


図 10 『尾張名所図会』に描かれた外堀外縁の石垣

(3) 名古屋城に存在した舟運施設

文献史料等に記された舟運に関する施設を下記に示した(図 11)。出典はことわりのない限り『金城温古録』。

ア 南波渡場

本丸搦手馬出の東、二之丸埋門から降りた所にある波止場。幕末の写真では埋門の下に木製の大掛かりな階段があった。常時船はつないでいなかったとあるが、写真では一艘の小舟が写っている。この波止場は、二之丸御殿に居住していた藩主および家族などが下御深井御庭に行く際に使用された。

イ 北波渡場

南波渡場の北、堀の対岸にある波止場で、南波渡場から下御深井御庭に行く舟の下船場。竹長押茶屋のすぐ南にあった。幕府の上使を下御深井御庭でもてなした際、飾り付けた御座船を係留したとある。明治 20 年代に水堀北岸の護岸工事が行われたため、遺構は残っていない。

ウ 御次波渡場

残された絵図・記録・写真から、水堀北岸、茅庵御門の東にあったと思われる。東北隅櫓の北側付近か。御次波渡場のすぐ西には御船番所や御船蔵があり、水運のセンター的な場所であった。御船番所には水主（かこ。舟の漕ぎ手）が常駐し、船蔵には普段は使用しない御座船や、堀の掃除や草刈をするための作業船が係留されていた。ここも、明治 20 年代に水堀北岸の護岸工事により遺構は残っていない。なお、藩主が茅庵へ御成の際「茅庵南波渡場」が利用されたとあるが、この御次波渡場との関係は不明、あるいは同一か。

エ 御船上場

『金城温古録』によれば、巾下門の北、辰の口の石橋から 21 間（約 40m）の場所にあったとあるが、幕末には跡形もなかった。もともとの利用形態は不明であるが、宝永 6 年

（1709）4 代藩主徳川吉通が知多巡行の帰り、城に入るため水堀を舟で通ったとあるが、あるいはその際上船場として使用されたのであろうか。また初代義直が「巾下御堀」から乗船したとあるが、あるいはこの御船上場か。遺構は残っていない。

（4）名古屋城における舟運の事例

名古屋城水堀では、近世においてさまざまな舟運があり、これを日常的、臨時的、非常時に分類した。出典はことわりのない限り『金城温古録』。

ア 日常的な舟運

- ・藩主が下御深井御庭で遊ぶため

10 代藩主徳川斉朝はひんぱんに下御深井御庭に行き、水鳥の狩猟などを楽しんだ。時には藩主の家族や女中も下御深井御庭に出かけることがあった。その際南波渡場～北波渡場を使用した。

- ・見廻り

朝・昼・夜の 1 日 3 回、役人が舟で堀内を見回った。

- ・掃除・草刈り

堀の掃除や、堀岸に生える葦や薄などを刈り取るため、役人が舟を使用した。

イ 臨時的な舟運

- ・東福門院院使の接待

初代藩主徳川義直の時代、東福門院（御水尾天皇の中宮、将軍秀忠の娘）の院使が江戸へ下った時、水堀に津島祭礼の山船を模した舟を浮かべてもてなした。院使や藩主の家族は二之丸の堀際にある迎涼閣や竹楼で見学した。

- ・上使の接待

幕府の上使が名古屋城に来た際、上使をもてなすために御座船に乗せ、下御深井御庭の御茶屋まで招き入れた。

- ・徳川吉通が帰城で利用

宝永 6 年（1709）9 月 2 6 日、知多巡行を終えた 4 代藩主徳川吉通は本町筋を北上し、京町筋を西に向かった。御園御門の外を通りすぎ、巾下で舟に乗って城に帰った。舟に乗ったのは御船上場、降りたのは南波渡場であろうか。通常、藩主一行は、本町筋からは本町御門を入り、二之丸大手門から二之丸御殿に入るとされる（図 12）

ウ 非常時の舟運

- ・火災時の避難

万一城内で火災が発生するか、火事が城内に迫った際、藩主や家族たちが南波渡場から北波渡場経由で下御深井御庭まで避難することになっていた。舟は一艘 10 人まで、人と道具といっしょに乗ってはいけない、などの決まりがあった。

- ・藩主が城を脱出

御土居下同心の口伝によれば、敵軍が名古屋城に迫った場合、藩主は埋門～南波渡場～北波渡場経由で城を脱出し、同心たちの警護により木曾方面まで落ち延びる手はずである、という。

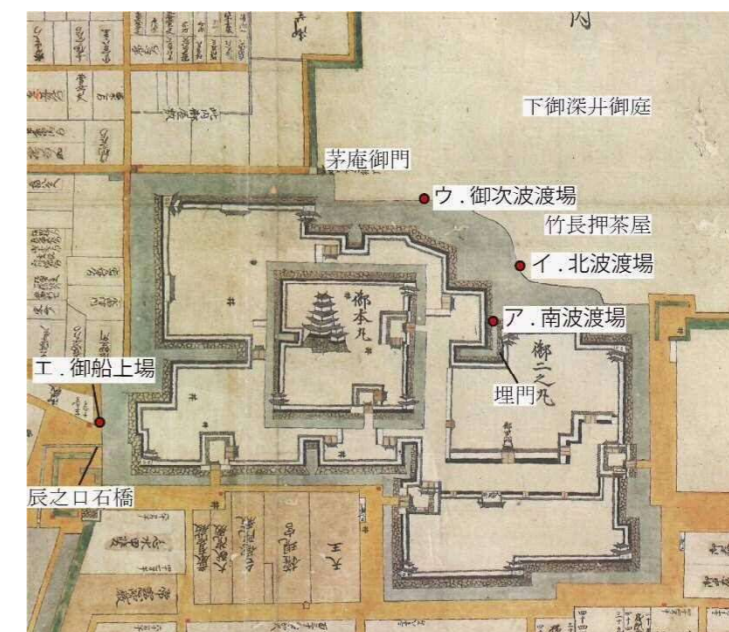


図 11 舟運施設位置図(『尾府名古屋図』(名古屋市蓬左文庫蔵)に一部加筆)

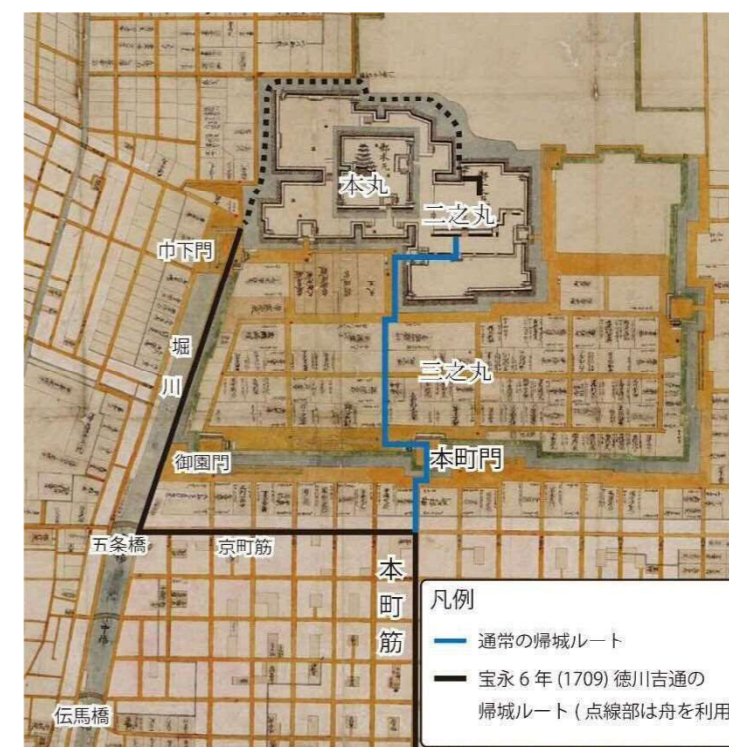


図 12 宝永6年(1709)徳川吉通の帰城ルート(『尾府名古屋図』(名古屋市蓬左文庫蔵)に一部加筆)

園路改修計画について

1 園路改修の概要

(1) 趣旨

老朽化した園路舗装、古い排水構造物を見直し、段差の少ないバリアフリー化を図るとともに、歴史的景観を損なわない意匠性等に配慮した園路に改修することで、来場者が安全で快適に観覧できるようにするもの。

(2) 現状と課題

- ・「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」では、主要な施設への経路等について誰もが利用しやすいものにするため改修整備を行うこととしている。
- ・名古屋城内の園路は、施工より 20 年以上経過し、老朽化による不陸や古い排水構造物による段差が目立つようになっている。

特別史跡名古屋城跡保存活用計画「第 8 章 整備」抜粋

8-1 整備の方向性 (201 ページ)

■名古屋城の歴史的価値や魅力をわかりやすく伝え、さらなる魅力を高める「活用のための整備」を行う

(3) 便益施設等や園路・安全柵等の施設の整備により、快適性・安全性を踏まえた観覧環境を整える

- ・歴史的景観を損なわない意匠、形態、色彩等の方針を定めた上で整備を行う。
- ・誰もが利用しやすいものにするため、主要な施設への経路等について『福祉都市環境整備指針』等に基づきバリアフリー化が必要なものは改修整備を行う。

2 今後の進め方

(1) 現状と当面の方向性

現状

- ・古い排水構造物が残存しており、園路に段差が生じている。
- ・保存活用計画に基づく保存整備工事、及び名古屋城の魅力向上に資するイベントなどにおいて、大型車両を含む車両が通行している。特に、来場者の往来が多い主要な園路において、車両通行が多く、舗装の劣化が進行している。

方向性

- ・排水構造物においては、段差の少ないバリアフリー対応のものに改修する。
- ・園路舗装改修にあたっては、単に従前の舗装構成とするのではなく、耐久性の向上、歴史的景観を損なわない意匠、形態、色彩等を検討する。
- ・当面は、名古屋城の入口（正門及び東門）と見学施設（本丸御殿など）を結ぶ、来場者の往来が多い主要な園路を対象に園路改修を行う。（図 1 参照）

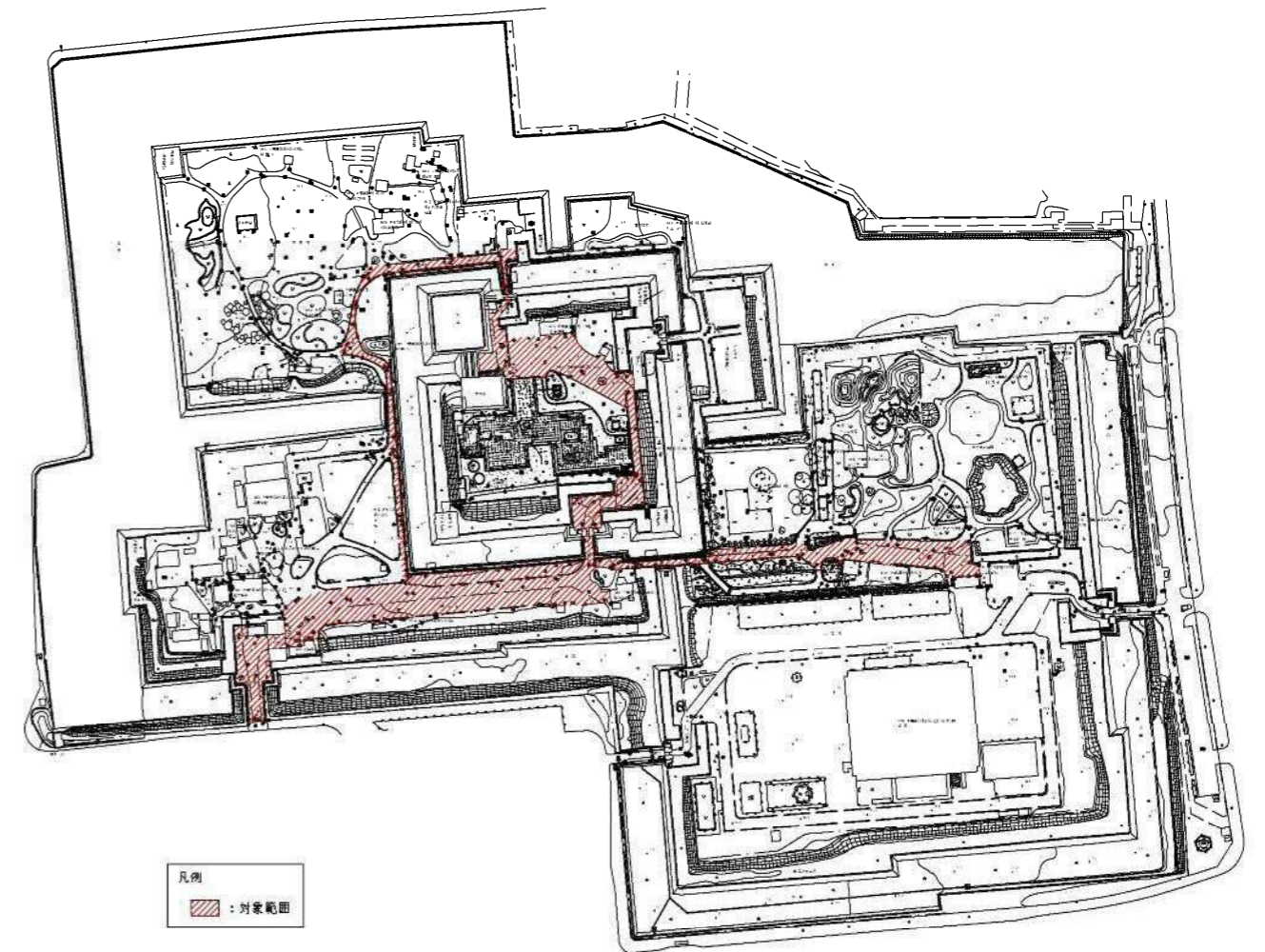


図 1 園路改修対象範囲

(2) 園路改修における検討事項

園路舗装改修において、耐久性、歴史的景観等を勘案した舗装材を検討する必要がある。アスファルト舗装、ブロック舗装など、種別ごとの代表的な舗装材について特徴を整理した舗装材比較表は表1のとおり。

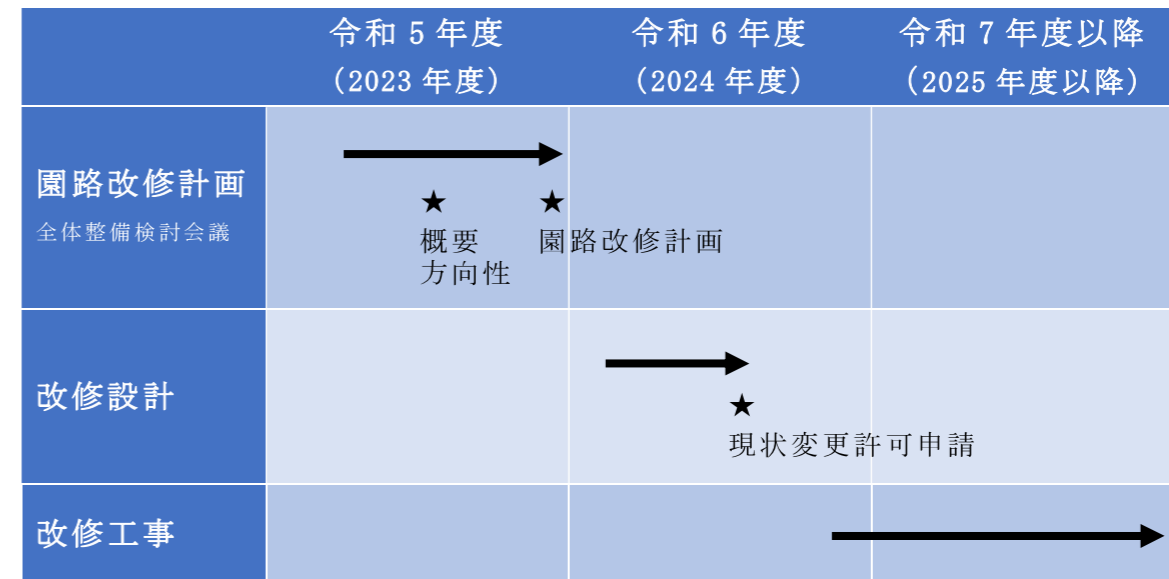
表1 舗装材比較表(参考)

種別	アスファルト舗装		ブロック舗装	その他
一般名称	(既設舗装) 樹脂系豆砂利舗装	脱色アスファルト舗装	凸凹凹凸ライン入りブロック	自然石
施工事例				
性能	透水性、非透水	透水性、非透水	透水性	非透水
形態	・目地がなくシームレス ・5cm程度のアスファルト舗装の上に、樹脂バインダーでブレンドした豆砂利15mm程度を施工	・目地がなくシームレス ・5cm程度のアスファルト舗装	・ブロック間は砂詰め ・20cm内、厚さは6cm程度	・ブロック間は砂詰め ・ブロックサイズは任意
意匠性 色彩				
	・砂利の大きさは5mm程度 ・砂利によって色彩を変えられる	・自然石の大きさは13mm程度 ・自然石によって色彩を変えられる	・ローレット仕上(擬似目地) ・コンクリートの色彩	・粗面仕上(細かい凹凸) ・自然界に存在する色彩
耐久性	・雨水等により劣化し、豆砂利の剥離等が発生する ・汚れは目立ちづらい	・雨水等により劣化し骨材の剥離等が発生する ・汚れは目立ちづらい	・段差解消機能の凸凹凹凸があり、段差は発生しづらい ・発色が経年で汚れ等が目立つ場合もある	・経年変化に強い ・汚れは自然な風合いとなる
施工性	・50~70㎡/日程度の施工が可能 ・即日開放が可能	・50~70㎡/日程度の施工が可能 ・即時開放が可能	・50~70㎡/日程度の施工が可能 ・即時開放が可能 ※乾式施工の場合	・30㎡/日程度の施工 ・解放までの養生期間2週間程度かかる ※基礎コン打設+モルタルでの漏式施工
単価(円/㎡)	14,000円	12,000円	14,000円	24,000円

※基本的に、新規掘削は行わず、既設の舗装構成、掘削範囲内にとどめる

(3) 今後の予定

- ・園路改修における検討事項を踏まえた、園路改修計画を策定する。
- ・令和6(2024)年度以降、園路改修計画を踏まえ、詳細な改修設計を行い、園路改修工事に着手する。



★：全体整備検討会議(予定)

名古屋城植栽管理計画について

1. 目的

遺構の保存に影響を与える植栽や、遺構の顕在化、眺望を妨げる植栽、来場者への危険性が懸念される植栽等の適切な整備を行い、城跡にふさわしい風致を整えること。

2. 計画策定の根拠

特別史跡名古屋城跡保存活用計画に基づき、特別史跡名古屋城跡の植栽管理計画の策定に着手する。

特別史跡名古屋城跡保存活用計画 「第6章 6-3 植栽管理計画」

計画的に植栽管理を行うため、各地区の特徴を踏まえたメリハリのある維持管理や、周辺の植栽にも留意した特別史跡名古屋城跡の植栽管理計画を策定する。

3. 名古屋城内植栽現況調査（令和4（2022）年度）

（1）樹木台帳（平成21年度（2009年）樹木調査結果）の更新

- ・高木（樹高3m以上） 3,301本
- ・中木（樹高3m未満） 1,185本
- ・低木 玉物 988株 寄植え 423箇所 生垣 123箇所

（2）遺構の保存に影響を及ぼすもの（対象樹木978本）

対象とした遺構：本質的価値を構成するものや本質的価値の理解を促進するものなど

- ・遺構から3mを目安とした範囲
- 影響度(3) 397本 影響度(2) 485本 影響度(1) 5本

（3）城郭としての歴史的景観を阻害しているもの

①視点場からの眺望を阻害している植栽

- ・城内の視点場で影響する植栽（視点場18箇所） 420本
- ・城外の視点場で影響する樹木（視点場17箇所） 1,204本

②城郭としての歴史的景観にふさわしくないもの

- ・影響度(3) 中高木 18本 影響度(2) 中高木 20本

（4）安全性が懸念されるもの（対象樹木1,291本）

園路及び広場から5m奥までの範囲で樹高5m以上の樹木

- ・倒木危険度 影響度(3) 193本 影響度(2) 278本 影響度(1) 396本
- ・落枝危険度 影響度(2) 118本 影響度(1) 347本
- ・根上危険度 影響度(1) 206本

（5）四季を彩る植栽（四季を彩る花木など）

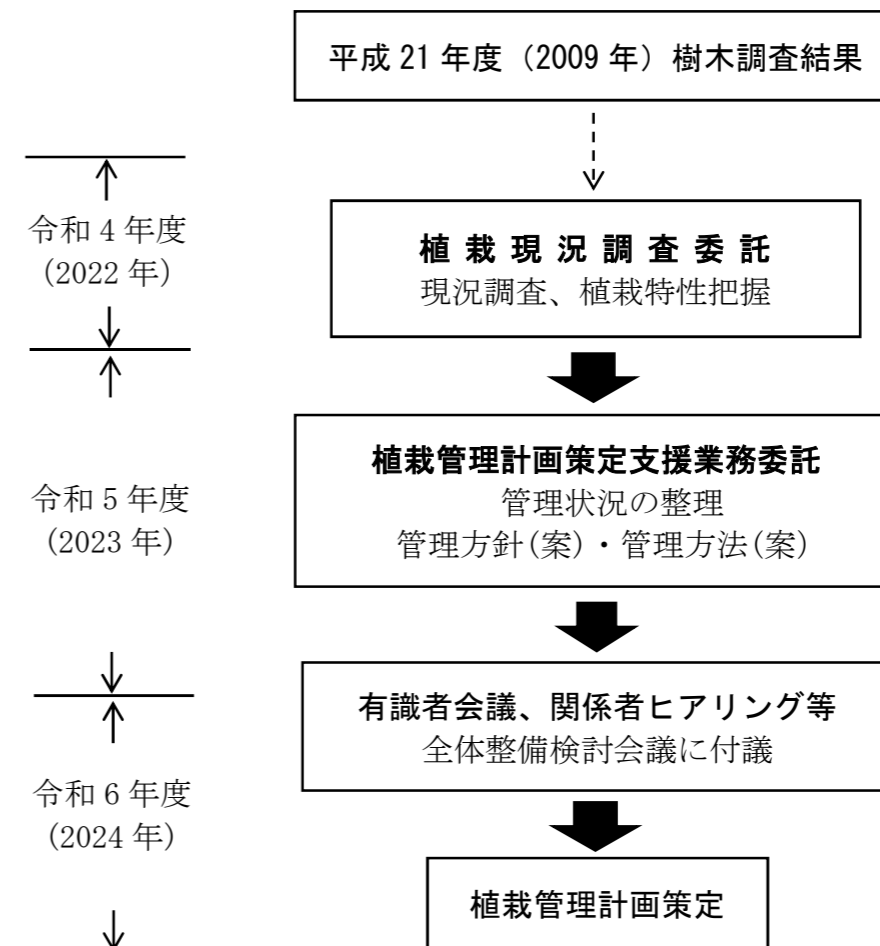
- ・ウメ 中木 78本 サクラ 中高木 841本 モミジ 中高木 173本
- ツバキ 中高木 285本 低木 148本 457m

（6）金城温古録に記載された植栽

保存活用計画資料編「資料-3『金城温古録』に記載された植栽」の樹種と範囲を対象として調査。

- ・カヤ 1本 クロマツ 213本 サクラ 4本 スギ 10本 モミジ 31本

4. 計画策定までの流れ



名古屋城内植栽現況調査

【概要版】

1. 樹木台帳の更新	P 1
2. 遺構の保存に影響を及ぼすものの調査	P 4
3. 城郭としての歴史的景観を阻害しているものの調査	P 6
3-1 視点場からの眺望を阻害している植栽の調査	P 6
3-2 城郭としての歴史的景観にふさわしくないものの調査	P 9
3-3 城内の景観を阻害している低木の調査	P 1 1
4. 安全性が懸念されるものの調査	P 1 3
5. 四季を彩る植栽	P 1 7
6. 金城温古録に記載された植栽	P 1 9

令和5年(2023年) 3月

1. 樹木台帳の更新

1.目的

平成 21(2009)年度調査(以下、前回調査という。)に基づく樹木台帳(位置図及び一覧※)の更新及び以下の対象樹木について再測定を行う。

※:樹木管理台帳(伐採記録を反映)を使用:令和4(2022)年 8 月時点のデータであり、この時点で伐採記録のある樹木は調査対象から除いた

2.調査範囲

図 1-1の調査対象範囲内に分布する樹木(高木、中木、低木)を調査した。前回調査区域に加えて、「天王坊」エリアを追加した。本調査での樹木区分は樹木の特性を考慮して、以下の通りとした。

高木:樹木特性として高木に区分される種の樹高 3m 以上の個体

中木:樹木特性として高木に区分される種の樹高 3m 未満及び、樹木特性として中木に区分される樹木

低木:植栽の状況から、玉物、寄植え、生垣に区分

3.調査結果の整理方法

高木、中木、低木について、それぞれ以下の項目を測定し、樹木台帳の更新を行った。

台帳については、本業務で調査した樹木ごとに、エリア名、図面上のメッシュ番号(縦軸、横軸)、樹木 NO、図面上の位置(X,Y で表示)、樹木区分(高木・中木・低木(玉物、寄植え、生垣))、樹種名、測定日、各樹木の測定値を整理した。なお、高木については測定した幹周から直径を算出して台帳に整理した。

(1)高木の測定項目

- ・位置、樹高、幹周、枝張(なお、直径は幹周から計算で算出)

(2)中木の測定項目

- ・位置、樹高、枝張

(3)低木の測定及び台帳更新

- ・低木は、玉物、寄植え、生垣で、以下の項目を測定した。

- ・玉物 :位置、玉物の幅(直径)、高さ
- ・寄植え :位置、面積(長径×短径)、高さ
- ・生垣 :位置、幅、高さ、延長(抜きの距離についても記載)

(4)エリア区分について

報告書においてエリアごとの整理を行う「エリア」とは「名古屋城跡保存活用計画」に示された地区区分に、「天王坊」を加え、エリア名で示すものとする(図1-1 参照)。

4.調査結果

(1)樹木区分別データの状況

本調査の結果、調査対象地内の既存樹木は高木 3,301 本、中木 1,185 本、低木(玉物)988 株、低木(寄植え)423 箇所、低木(生垣)123 箇所である。

また、新規樹木(既存樹木のうち新たに現地で確認された樹木)、伐採木(前回調査に基づく樹木台帳に記載があるが、本調査において現地で確認されなかった樹木)、立枯れ(本調査において立枯れ状態で確認された樹木)はそれぞれ、表 1-1、表 1-2に示した通りである。

エリアごとの特徴を見てみると、高木については、既存樹木が多いエリアは御深井丸、二之丸(北)、本丸、西之丸エリアの順である。また、新規樹木が多いのは御深井丸エリア、伐採木の最も多いのは西之丸エリア、立枯れが最も多いのは御深井丸エリアであった。

中木については、既存樹木が多いエリアは御深井丸、二之丸(北)、天王坊、西之丸、本丸エリアの順である。また、新規樹木が多いのは御深井丸エリア、伐採木の最も多いのは西之丸エリア、立枯れが最も多いのは二之丸(北)エリアであった。

表1-1 台帳の整理結果概要(高木・中木)

樹木区分	高木				中木			
	既存樹木		伐採(本) (切り株など)	立枯れ(本)	既存樹木		伐採(本)	立枯れ(本)
	(本)	新規(本)			(本)	新規(本)		
本丸エリア	546	20	66	11	83	18	11	6
御深井丸エリア	1,303	347	98	33	598	189	58	21
西之丸エリア	413	21	287	3	90	3	145	11
二之丸(北)エリア	584	33	130	15	311	21	33	26
二之丸(南)エリア	113	1	5	0	5	1	2	0
外堀(水堀)エリア※	14	0	21	0	0	0	1	1
外堀(空堀)エリア	90	2	0	0	2	2	0	0
天王坊エリア	238	238	0	2	96	96	0	2
合計	3,301	662	607	64	1,185	330	250	67

※外堀(水堀)エリア:水堀護岸上の樹木

(赤字は各項目で最も数の多いエリア)

低木(玉物)については、既存樹木が多いエリアは御深井丸エリア及び二之丸(北)エリア、本丸エリア、西之丸エリアの順である。また、新規樹木が多いのは二之丸(北)エリア、伐採木の最も多いのは西之丸エリアであった。

低木(寄植え)については、既存樹木が多いエリアは二之丸(北)エリア、御深井丸エリア、外堀(水堀)エリア、本丸エリアの順である。また、新規樹木が多いのは二之丸(北)エリア、伐採木が最も多いのも二之丸(北)エリアであった。

低木(生垣)については、既存樹木が多いエリアは二之丸(北)エリア、御深井丸エリア、外堀(空堀)エリアの順である。また、新規樹木が多いのは天王坊エリア、伐採木の最も多いのは御深井丸エリア、外堀(水堀)エリアであった。

表1-2 台帳の整理結果概要(低木)

樹木区分	低木(玉物)				低木(寄植え)				低木(生垣)			
	既存樹木		伐採(株)	立枯れ(株)	既存樹木		伐採(箇所)	立枯れ(箇所)	既存樹木		伐採(箇所)	立枯れ(箇所)
	(株)	新規			(箇所)	新規			(箇所)	新規		
本丸エリア	202	1	31	1	43	0	5	0	10	0	2	0
御深井丸エリア	337	16	48	0	63	3	4	0	30	2	18	0
西之丸エリア	111	7	181	0	17	3	30	0	10	0	7	0
二之丸(北)エリア	306	74	1	1	216	17	77	3	35	7	2	0
二之丸(南)エリア	6	4	2	0	19	0	0	0	0	0	0	0
外堀(水堀)エリア	15	2	2	0	55	1	3	0	0	0	18	0
外堀(空堀)エリア	4	0	1	0	1	0	0	0	27	6	1	0
天王坊エリア	7	7	0	0	9	9	0	0	11	11	0	0
合計	988	111	266	2	423	33	119	3	123	26	48	0

(赤字は各項目で最も数の多いエリア)

(2)エリア別樹種の状況

【高木】

既存樹木を対象にエリア別に樹種の状況に応じて、高木・中木は本数、低木(玉物)は株数が多く、低木(寄植え)は面積(m²)が大きく、低木(生垣)は延長(m)の長い順に1位～3位の種を抽出した。

エリア別の高木の既存樹木本数が多い1位～3位を表1-3に示した。高木は、城内の本丸、御深井丸、西之丸、二之丸(北)エリア、また外堀(空堀)エリアはクロマツもしくはサクラがともに1～3位の間に入ってきている。その他二之丸(南)エリアはクロガネモチ、外堀(水堀)エリアはヤナギ、天王坊エリアはツバキが最も多かった。

表1-3 エリア別上位3位までの確認種と本数(高木)

エリア名	1位		2位		3位	
	樹種	本数	樹種	本数	樹種	本数
本丸エリア	クロマツ	219	サクラ	130	モミジ	37
御深井丸エリア	サクラ	299	クロマツ	264	ネズミモチ	90
西之丸エリア	サクラ	141	クロマツ	88	アラカシ	29
二之丸(北)エリア	クロマツ	124	サクラ	110	モミジ	71
二之丸(南)エリア	クロガネモチ	28	ウバメガシ	15	エノキ	12
外堀(水堀)エリア	ヤナギ	5	アキニレ	3	クロマツ	2
外堀(空堀)エリア	サクラ	79	エノキ	5	クロマツ	2
天王坊エリア	ツバキ	51	モチノキ	43	ムクノキ	21

(緑字:クロマツ、赤字:サクラを表示)

【中木】

エリア別の中木の既存樹木本数が多い1位～3位を表1-4に示した。中木は、エリアによって樹種の傾向が異なるが、比較的ツバキもしくはサザンカが上位に来るエリアが多く、御深井丸、西之丸、二之丸(北)、天王坊エリアでこれらの種の既存樹木本数が多かった。そのほかの樹種では、本丸及び御深井丸エリアはキンモクセイが最も多く、西之丸エリアはウメが最も多かった。

表1-4 エリア別上位3位までの確認種と本数(中木)

エリア名	1位		2位		3位	
	樹種	本数	樹種	本数	樹種	本数
本丸エリア	キンモクセイ	16	パショウ	12	サクラ	10
御深井丸エリア	キンモクセイ	187	ハマヒサカキ	84	サザンカ	29
西之丸エリア	ウメ	32	キンモクセイ	12	ツバキ	10
二之丸(北)エリア	ツバキ	105	サザンカ	43	ウメ	27
二之丸(南)エリア	クロガネモチ	1	シュロ	1	トベラ	1
外堀(水堀)エリア	—	—	—	—	—	—
外堀(空堀)エリア	キャラボク	1	サクラ	1	—	—
天王坊エリア	サザンカ	25	ツバキ	12	アオキ	7

(緑字:ツバキ、赤字:サザンカを表示)

【低木(玉物)】

エリア別の低木(玉物)の既存樹木株数が多い1位～3位を表1-5に示した。低木(玉物)は、城内のエリアである、本丸、御深井丸、西之丸、二之丸(北)エリアで同様の樹種の特徴を示し、ツツジ、サツキ、ツゲの順に株数が多かった。

二之丸(南)エリアはサザンカ、トベラ、ナワシログミ等が1株ずつみられたのみである。外堀(水堀)エリアにはサツキとツツジの2種類のみであり、外堀(空堀)エリアにはカラタチのみ、天王坊エリアはツゲのみが見られた。

表1-5 エリア別上位3位までの確認種と株数(低木(玉物))

エリア名	1位		2位		3位	
	樹種	株数	樹種	株数	樹種	株数
本丸エリア	ツツジ	99	サツキ	74	ツゲ	12
御深井丸エリア	ツツジ	221	サツキ	64	ツゲ	17
西之丸エリア	ツツジ	44	サツキ	40	ツゲ	14
二之丸(北)エリア	ツツジ	86	サツキ	76	ツゲ	55
二之丸(南)エリア	サザンカ	1	トベラ	1	ナワシログミ	1
外堀(水堀)エリア	サツキ	11	ツツジ	4	—	—
外堀(空堀)エリア	カラタチ	4	—	—	—	—
天王坊エリア	ツゲ	7	—	—	—	—

(青線枠内は傾向が同じエリア)

【低木(寄植え)】

エリア別の低木(寄植え)の面積が多い1位～3位を表1-6に示した。低木(寄植え)は、エリアによって樹種の傾向が異なるが、ツツジとサツキの面積が多いエリアが多かった。その他の樹種では御深井丸エリアはタケが、外堀(水堀)エリアではアベリアが最も面積が大きかった。

表1-6 エリア別上位3位までの確認種と面積(m²)(低木(寄植え))

エリア名	1位		2位		3位	
	樹種	面積(m ²)	樹種	面積(m ²)	樹種	面積(m ²)
本丸エリア	ツツジ	253.1	タケ	153.0	ササ	43.6
御深井丸エリア	タケ	342.5	ツツジ	167.7	混植	61.6
西之丸エリア	ツツジ	40.9	サツキ	17.2	アオキ	6.2
二之丸(北)エリア	サツキ	562.7	ツツジ	518.4	アジサイ	117.8
二之丸(南)エリア	ツツジ	137.2	サザンカ	34.0	キャラボク	30.7
外堀(水堀)エリア	アベリア	199.4	ツツジ	148.8	アベリア・ササ混植	82.3
外堀(空堀)エリア	サツキ	3.2	—	—	—	—
天王坊エリア	ツツジ	20.4	クサツゲ	14.8	レンギョウ	6.7

(赤字:ツツジ、緑字:サツキを表示)

【低木(生垣)】

エリア別の低木(生垣)の距離が長い1位～3位を表1-7に示した。低木(生垣)については、比較的、キャラボク、サザンカの延長が長く、本丸、御深井丸、西之丸、二之丸(北)、外堀(空堀)、天王坊エリアでこれらの延長が長かった。その他の種では、御深井丸エリアでは様々な種の混植が、二之丸(北)エリアではツバキの延長が最も長かった。二之丸(南)エリアと外堀(水堀)エリアには低木(生垣)は見られなかった。

表1-7 エリア別上位3位までの確認種と距離(m)(低木(生垣))

エリア名	1位		2位		3位	
	樹種	延長(m)	樹種	延長(m)	樹種	延長(m)
本丸エリア	キャラボク	169.9	ツゲ	101.0	アオキ	41.8
御深井丸エリア	混植	114.3	ツツジ	73.7	キャラボク	60.1
西之丸エリア	キャラボク	105.0	アオキ	21.4	サザンカ	19.5
二之丸(北)エリア	ツバキ	454.1	サザンカ	239.3	マサキ	85.5
二之丸(南)エリア	—	—	—	—	—	—
外堀(水堀)エリア	—	—	—	—	—	—
外堀(空堀)エリア	カラタチ	359.4	キャラボク	12.5	—	—
天王坊エリア	サザンカ	55.4	—	—	—	—

(赤字:キャラボク、緑字:サザンカを表示)

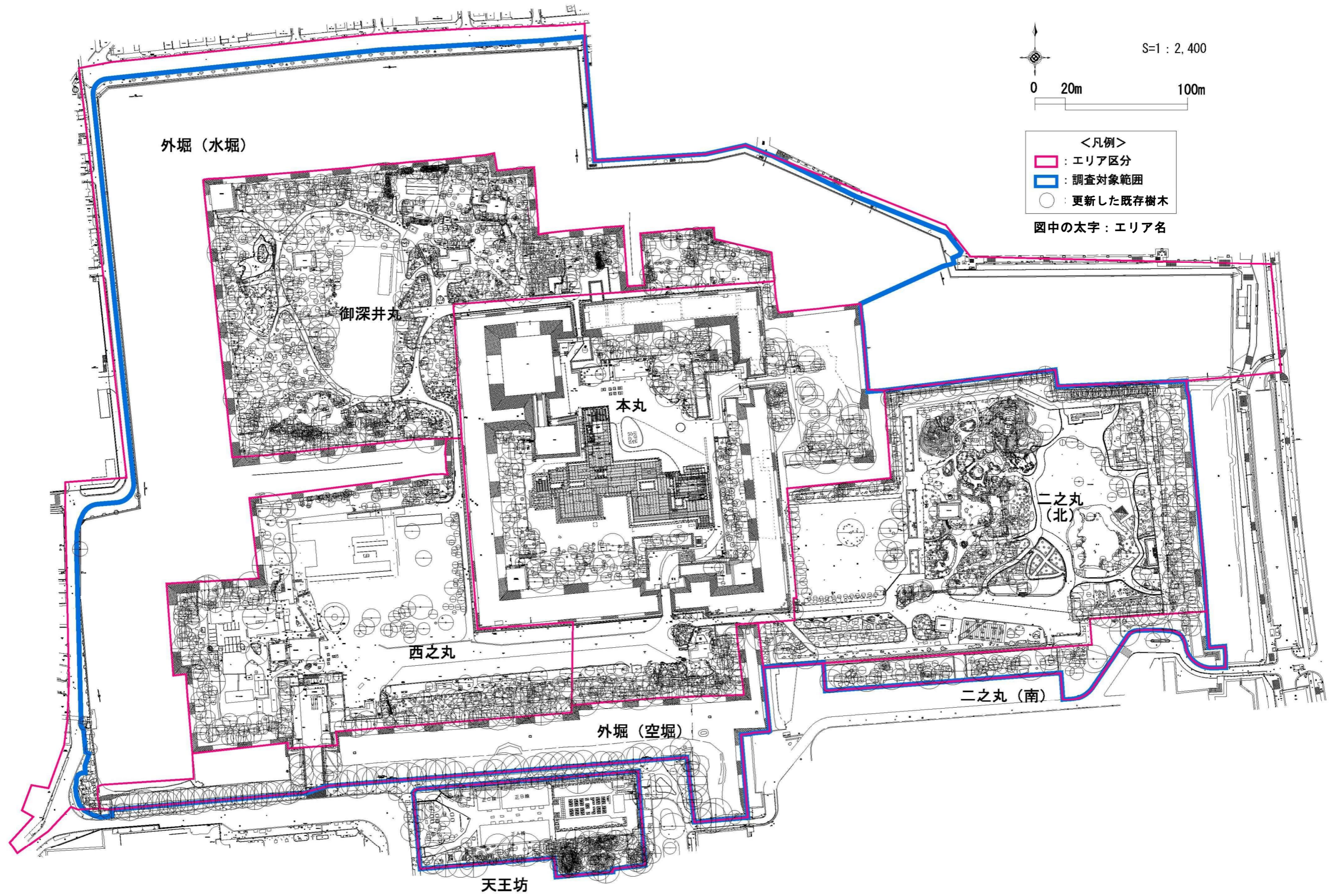


図 1-1 樹木台帳の更新結果(既存樹木位置図:全体)

2. 遺構の保存に影響を及ぼすものの調査

1. 目的

石垣や建造物遺構等に近接(幹までの距離が3mが目安)し、遺構を毀損しているもの或いは毀損のおそれがある樹木(高木・中木)を対象とし位置・樹種・樹高・幹周・離隔(天端石・根石・壁など建造物から)の影響度を調査する。

2. 調査範囲

(1)調査対象の遺構:本調査で対象とする遺構について、以下の表に整理する。

表2-1 遺構の保存に影響を及ぼすものの調査対象遺構一覧

地区区分	I本質的価値を構成する諸要素	II本質的価値の理解を促進する諸要素	III歴史的経緯を示す諸要素
本丸	石垣、東南隅櫓、西南隅櫓、本丸表二之門、旧二之丸東二之門、井戸	本丸御殿、不明門、天守閣	石垣
二之丸(北)	石垣、南蛮練堀、井戸	-	-
西之丸	石垣	正門(榎多門)	-
御深井丸	石垣、西北隅櫓、井戸 天守礎石	-	乃木倉庫
二之丸(南)	石垣	-	-
外堀(空堀)	石垣	-	-
外堀(水堀)	石垣	-	-

(2)調査対象の樹木

調査対象とした遺構において、幹中心までの距離が3mを目安とした範囲にある樹木【高木】を対象とし、遺構への影響を調査する。

3. 調査結果の整理方法

(1)遺構に対する樹木の影響度の分類と影響度基準:遺構への緊急性や重要性から以下の4段階に分類する。

表2-2 遺構の保存に影響を及ぼすものの影響度の分類表

影響度のランク	影響度
影響度:3	遺構への影響があり、速やかに撤去すべき樹木 ・根が明らかに遺構へ伸長していて毀損等をおよぼしている樹木 ・枯損しており、遺構へ倒木の恐れがある樹木
影響度:2	遺構への影響があり、撤去すべき樹木であるが当面は剪定で対処する樹木 ・樹木が遺構方向に傾倒していて、枝が遺構に覆いかぶさっている樹木 ・樹木が遺構方向に傾倒していないが、枝が遺構に覆いかぶさっている樹木
影響度:1	遺構への影響が想定されるが、当面は残すべき樹木(経過観察) ・樹木が遺構方向に傾倒しているが、枝が遺構に覆いかぶさっていない樹木
影響度:0	遺構への影響が認められない樹木 ・樹木が遺構方向に傾倒せず、枝も遺構に覆いかぶさっていない樹木

上記の影響度の分類を基として、以下の基準で調査対象となる樹木の影響度を整理する。

表2-3 遺構の保存に影響を及ぼすものの影響度基準

		枯損の有無	
		1:枯損している	2:枯損していない
根の状況	1:遺構に伸長あり	影響度:3	影響度:3
	2:遺構に伸長なし	影響度:3	影響度:2・1・0

		遺構への傾きの有無	
		1:傾倒している	2:傾倒していない
枝の状況	1:覆いかぶさっている	影響度:2	影響度:2
	2:覆いかぶさっていない	影響度:1	影響度:0

4. 調査結果

調査対象範囲における、遺構の保存に影響を及ぼすものの調査の結果は表2-4の通りである。

遺構の保存に影響を及ぼすものの調査で対象(およそ遺構から3mの範囲)は、総数978本であった。

影響度からの分類では、影響度「3」(根が明らかに遺構に伸長しているものや、枯損し倒木の恐れがある樹木)の樹木は397本、影響度「2」(根の伸長や枯損は認められないが、枝が遺構に覆いかぶさっている樹木)の樹木は485本、影響度「1」(根の伸長や枯損、枝は覆いかぶさっていないが、遺構へ傾倒している樹木)の樹木は5本、影響度「0」の樹木は(遺構への影響が認められない樹木)は91本であった。

構成要素区分では、石垣に影響する樹木は、893本、石垣以外の遺構に影響する樹木は85本であり、特に石垣に対する影響する樹木が約90%を占めている。石垣以外では天守礎石に影響する樹木が多い。

樹種については、影響度「3」の樹木は、サクラやクロマツが多く、特にサクラは、老木化により枯損が多くみられ、影響度「3」となっている。

表2-4 遺構の保存に影響を及ぼすものの調査 全体集計表

区分	構成要素	影響度				構成要素区分	
		影響度:3	影響度:2	影響度:1	影響度:0	石垣計	その他計
本丸	石垣	62	134	2	34	232	-
	東南隅櫓	(該当なし)				-	-
	西南隅櫓	1	0	0	0	-	1
	本丸表二之門	(該当なし)				-	-
	旧二之丸東二之門	(該当なし)				-	-
	井戸	0	2	0	0	-	2
	本丸御殿	(該当なし)				-	-
	不明門	(該当なし)				-	-
	天守閣	(該当なし)				-	-
計	63	136	2	34	232	3	
西之丸	石垣	129	38	1	11	179	-
	正門(榎多門)	3	1	0	0	-	4
	計	132	39	1	11	179	4
御深井丸	石垣	80	223	2	9	314	-
	西北隅櫓	(該当なし)				-	-
	井戸	0	2	0	4	-	6
	天守礎石	21	10	0	4	-	35
	乃木倉庫	2	3	0	0	-	5
計	103	238	2	17	314	46	
二之丸(北)	石垣	56	55	0	22	133	-
	南蛮練堀	10	7	0	0	-	17
	井戸	12	0	0	3	-	15
	計	78	62	0	25	133	32
二之丸(南)	石垣	1	3	0	2	6	-
	計	1	3	0	2	6	-
外堀(空堀)	石垣	17	3	0	1	21	-
	計	17	3	0	1	21	-
外堀(水堀)	石垣	3	4	0	1	8	-
	計	3	4	0	1	8	-
合計		397	485	5	91	893	85
該当樹木合計						978	



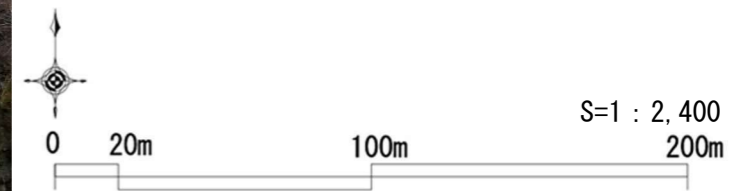
写真【外堀(空堀)】西側の状況



写真【御深井丸】北側石垣上部の状況



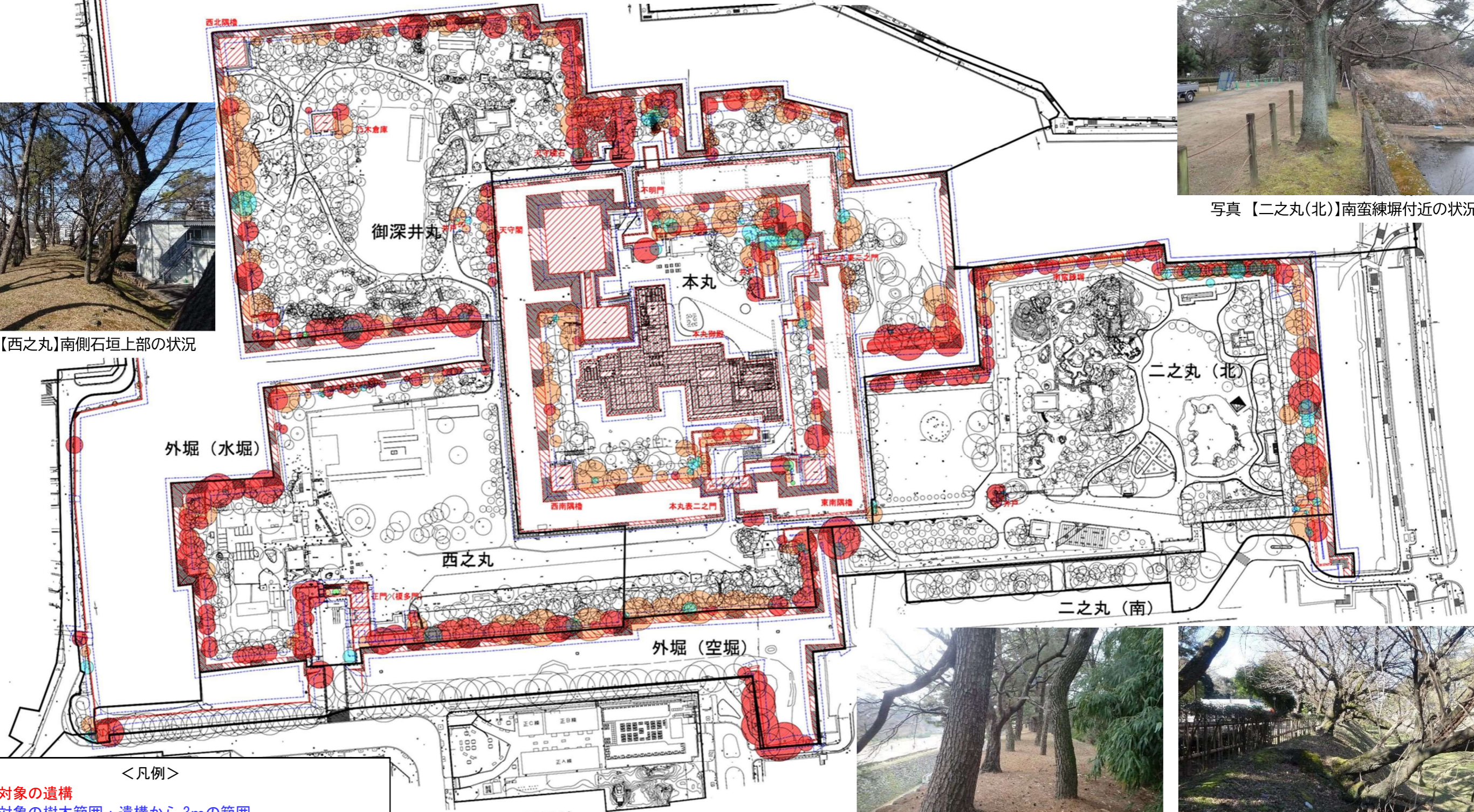
写真【御深井丸】天守礎石付近の状況



写真【二之丸(北)】南蛮練塀付近の状況



写真【西之丸】南側石垣上部の状況



- <凡例>
- ▨ : 調査対象の遺構
 - ▭ : 調査対象の樹木範囲：遺構から3mの範囲
 - : 「影響度：3」の樹木
 - : 「影響度：2」の樹木
 - : 「影響度：1」の樹木
 - : 「影響度：0」の樹木

図中の太字：エリア名



写真【本丸】南側石垣上部の状況



写真【外堀(空堀)】二之丸大手門付近の状況

図2-1 遺構の保存に影響を及ぼす調査 調査結果全体平面図と代表写真

3. 城郭としての歴史的景観を阻害しているものの調査

3-1 視点場からの眺望を阻害している植栽の調査

1.目的

名古屋城跡の城郭として、城内・城外の視点場から歴史的景観への眺望を阻害している植栽の調査を行う。

2.調査範囲

(1)眺望対象の歴史的景観:本調査で対象とする歴史的景観について、以下の表に整理する。

表 3-1 視点場からの眺望を阻害している植栽の調査の対象とする歴史的景観一覧

地区区分	I 本質的価値を構成する諸要素	II 本質的価値の理解を促進する諸要素
本丸	東南隅櫓、西南隅櫓、本丸表二之門、旧二之丸東二之門	不明門、天守閣
二之丸(北)	二之丸庭園(権現山と栄螺山)	—
西之丸	名古屋城のカヤ	正門(榎多門)
御深井丸	西北隅櫓	—

3.調査結果の整理方法

城内視点場、城外視点場ごとに、影響する調査対象樹木を以下の調査項目を現地で調査し整理する。

表 3-2 視点場からの眺望を阻害している植栽の調査の調査項目

調査項目	
影響範囲	・眺望対象とする歴史的景観の一部となる要素に影響する樹木や範囲や状況を調査

4.調査結果

(1)城内視点場からのまとめ

調査対象範囲における、視点場からの眺望を阻害している植栽の調査の内、城内視点場からの調査結果は以下の通りである。城内の視点場である①～⑱の視点場で影響する樹木の総数は 420 本(重複除く)であった。また、視点場の内②(本丸の南から分岐点)と⑨(本丸の北側に向かう分岐点)では影響する樹木は無かった。天守閣を望む視点場①④⑤⑥⑧⑩⑪⑭⑰⑱では、特に視点場①④⑤⑧⑪⑭で、天守閣の前面に多くの樹木があり、眺望に影響を及ぼしている。東南隅櫓を望む視点場③では 2 本、旧二之丸東二之門を望む視点場⑦では 3 本、正門(榎多門)、名古屋城のカヤを望む視点場⑫では、4 本、乃木倉庫を望む視点場⑬では 19 本、二之丸庭園栄螺山、二之丸庭園権現山を望む視点場⑮では 33 本、東南隅櫓を望む視点場⑯では27本と、各視点場から対象とする歴史的景観への眺望に影響する樹木がある。

表 3-3 城内視点場からの眺望を阻害している植栽の調査 全体集計表

視点場	概要	眺望対象の歴史的景観の一部の要素	影響する樹木本数(本)	
			樹木本数 (重複*含む)	総本数 (重複*除く)
①	正門から本丸へ向かう分岐点	天守閣、西南隅櫓	39	420
②	本丸の南から分岐点	本丸表二之門	0	
③	東門から本丸を向かう分岐点	東南隅櫓	2	
④	東門から初めに本丸を望む地点	天守閣、石垣	52	
⑤	桜の開花時期に開放する石垣上	天守閣	64	
⑥	桜の開花時期に開放する石垣上	天守閣	28	
⑦	本丸の東側から西に向かう分岐点	旧二之丸東二之門	3	
⑧	塩蔵構内	天守閣	47	
⑨	本丸の北側に向かう分岐点	不明門、天守閣	0	
⑩	本丸の北側から西に向かう分岐点	天守閣	1	
⑪	天守を背景に撮影される地点	天守閣	41	
⑫	正門に向かう分岐点	正門(榎多門)、名古屋城のカヤ	4	
⑬	御深井丸内	乃木倉庫	19	
⑭	御深井丸内	西北隅櫓、天守閣	109	
⑮	二之丸庭園を望む地点	二之丸庭園栄螺山、二之丸庭園権現山	33	
⑯	余芳から東南隅櫓を望む地点	東南隅櫓	27	
⑰	東南隅櫓内	天守閣	3	
⑱	西南隅櫓内	天守閣	31	

(2)城外視点場からのまとめ

城外視点場からの調査結果は以下の通りである。

城外の視点場である①～⑰の視点場で影響する樹木の総数は 1,204 本(重複除く)であった。天守閣の望む視点場①～⑩、⑫～⑰では、特に視点場①⑥⑦⑫⑬⑮で、天守閣の前面に多くの樹木があり眺望に影響を及ぼしている。

視点場⑯⑰は名城公園からの視点場であり、名城公園内の樹木が天守閣への眺望の影響を与えている。

視点場②③④⑬⑰では、城内の天守礎石周辺の樹木が天守閣への眺望に影響を与えており、これらの樹木は重複*している場合が多い。視点場⑩⑭では、天守閣への眺望を阻害している樹木は、本丸の西側付近の樹木が重複して眺望に影響を与えている。同様に視点場⑤⑥では、天守閣への眺望を阻害している樹木は、本丸の東側付近の樹木が重複して眺望に影響を与えている。

表 3-4 城外視点場からの眺望を阻害している植栽の調査 全体集計表

視点場	概要	眺望対象の歴史的景観の一部の要素	影響する樹木本数(本)	
			樹木本数 (重複*含む)	総本数 (重複*除く)
①	西側から西北隅櫓を望む視点場	西北隅櫓、天守閣	222	1,204
②	北側から西北隅櫓を望む視点場	西北隅櫓、天守閣	67	
③	藤棚から天守を望む視点場	天守閣	29	
④	藤棚から天守を望む視点場	天守閣	70	
⑤	藤棚から天守を望む視点場	天守閣	66	
⑥	東側から天守閣を望む視点場	天守閣	106	
⑦	東側から天守閣を望む視点場	天守閣	183	
⑧	愛知県体育館から天守を望む視点場	天守閣	51	
⑨	金シャチ横丁沿いから天守を望む視点場	天守閣	49	
⑩	歩道から天守を望む視点場	天守閣	76	
⑪	南側から正門を望む視点場	正門(榎多門)	4	
⑫	西側から天守閣を望む視点場	天守閣	135	
⑬	西側から西北隅櫓を望む視点場	天守閣	234	
⑭	能楽堂付近(清正公像付近)から天守を望む視点場	天守閣	76	
⑮	幅下橋から天守を望む視点場	天守閣	138	
⑯	名城公園より天守閣を望む視点場	天守閣	32	
⑰	名城公園より天守閣を望む視点場	天守閣	24	

※:重複:複数の視点場から対象への眺望を阻害している樹木

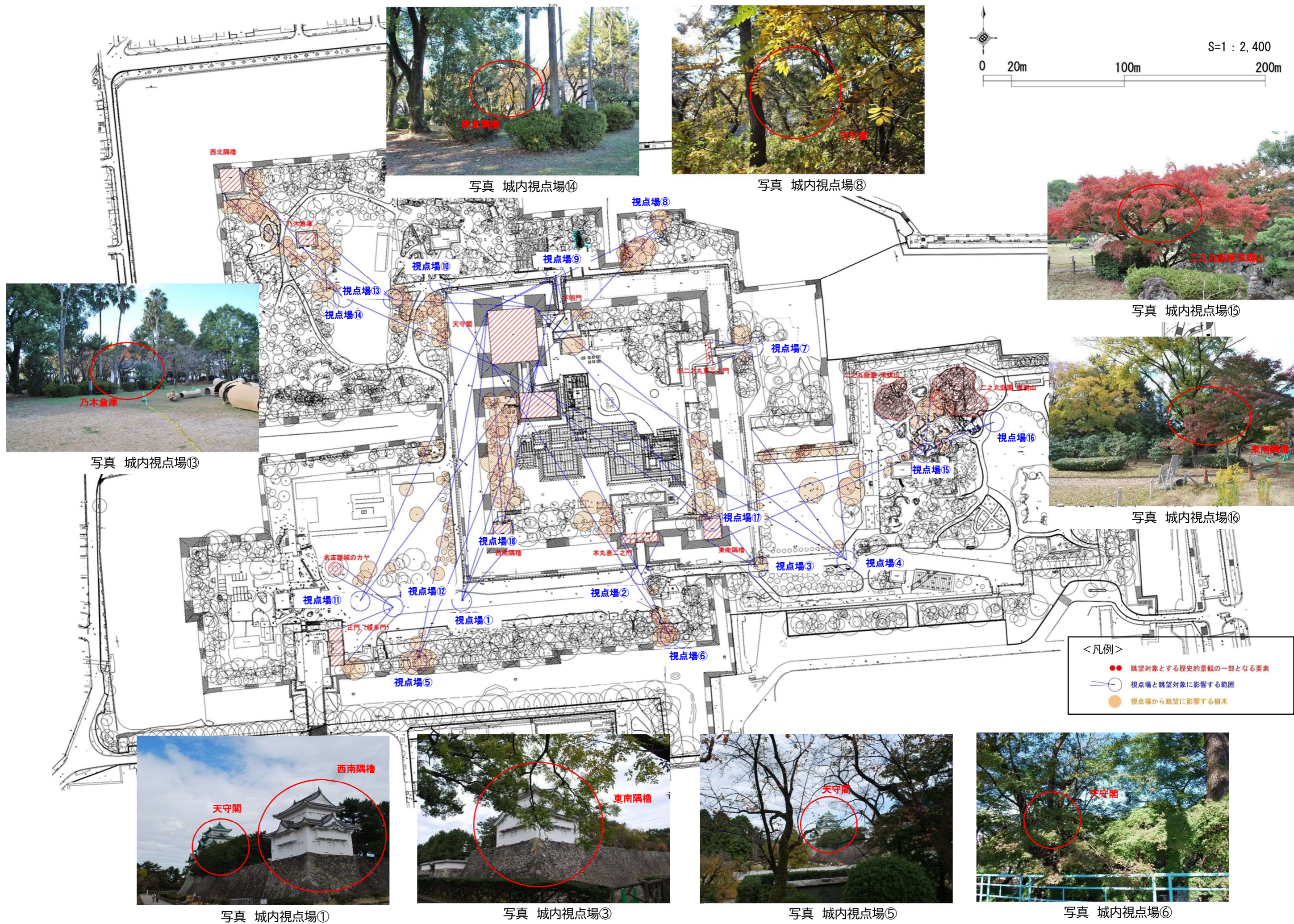


図3-1 視点場からの眺望を阻害している植栽の調査 城内視点場からの調査結果平面図と代表写真

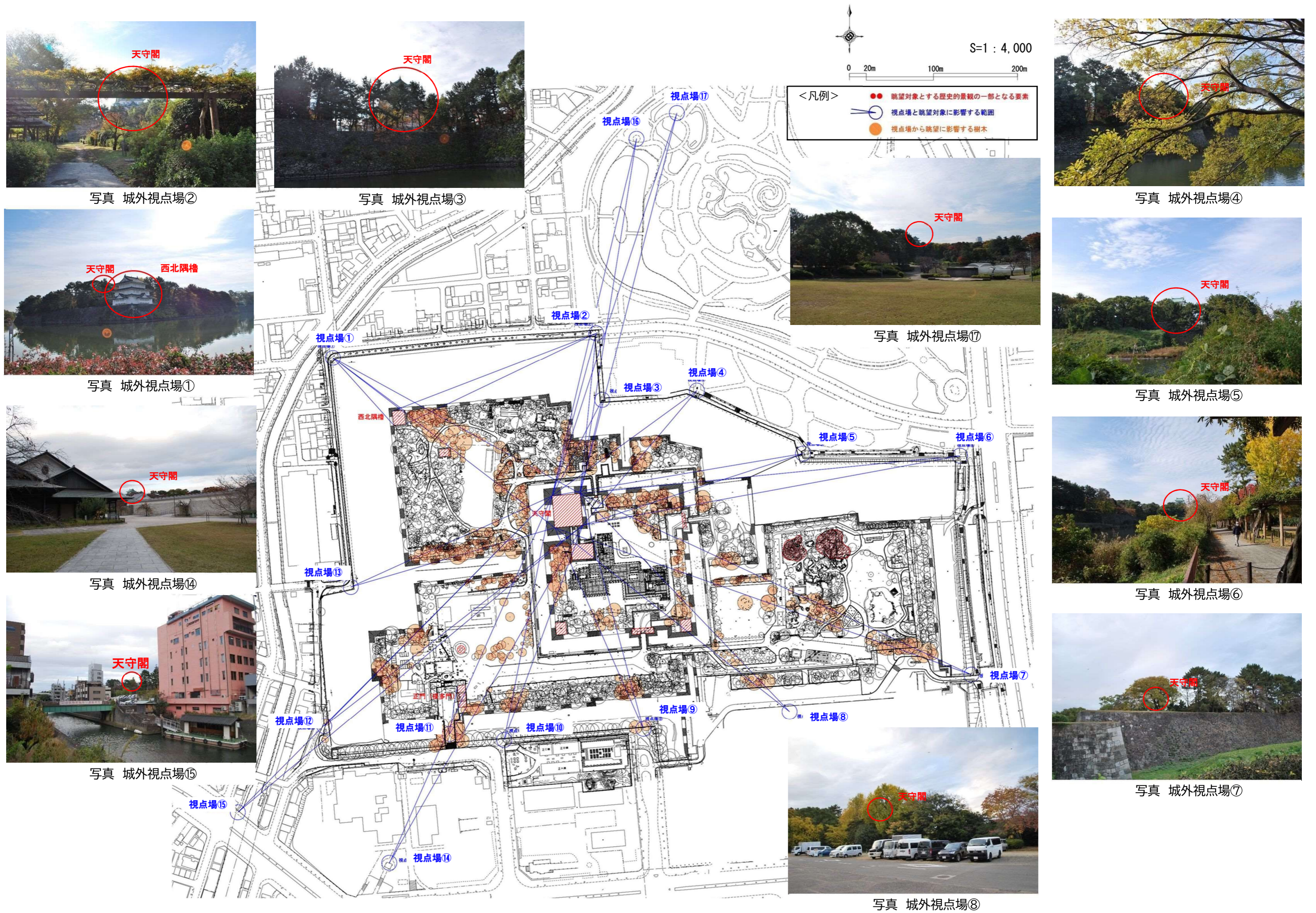


図3-2 視点場からの眺望を阻害している植栽の調査 城外視点場からの調査結果平面図と代表写真

3-2 城郭としての歴史的景観にふさわしくないものの調査

1.目的

名古屋城跡の城郭としての歴史的景観にふさわしくないものの調査を行う。

2.調査範囲

(1)外来種

外来種とは、明治時代以降海外から日本に持ち込まれた植物とし、参考資料として「明治前園芸植物渡来年表」磯野直秀、慶応義塾大学日吉紀要、自然科学.No42(2007.9),p.27-58を用いて外来種の判断を行う。

(2)実生木

実生木については、前回調査の樹木台帳に記載がなく、新たに確認された樹木を実生木として把握し、樹木台帳に掲載する。なお、樹高1m以下は自然に枯れる場合も多く、草刈りでの対応も可能と考えることから1m以上の樹木を対象とする。

但し、天王坊エリアは新規の調査区であるため、外来種のみを対象として影響評価を行った。

3.調査結果の整理方法

既存樹木と立枯れ木を対象とし、外来種かどうかという点と、外来種ではない実生木については、景観阻害を生じる可能性があるか(=樹高が大きくなるかどうか)で、影響度を4段階で整理する。

表 3-5 城郭としての歴史的景観にふさわしくないものの影響度の分類表

影響度のランク	影響度
影響度:3	生態系に被害を与える外来種(全既存樹木対象)
影響度:2	外来種(全既存樹木対象)
影響度:1	成長すると景観を阻害する可能性の高い在来種の実生木
影響度:0	成長しても景観を阻害する可能性の低い在来種の実生木

表 3-6 城郭としての歴史的景観にふさわしくないものの影響度の分類表

項目1	項目2	外来種		
		1:在来種	2:外来種	3:生態系に被害を与える外来種(生態系被害防止外来種リスト掲載種)
樹種の成長特性	1:低木種	影響度:0		
	2:中・高木種、藤本種*	影響度:1	影響度:2	影響度:3

※:つる性木本種

4.調査結果

(1)外来種の確認状況

調査の結果、調査方法に基づき、外来種として判断された樹種は以下の19種であった。その内、影響度「3」に該当する、生態系に被害を与える外来種に該当する種はトウネズミモチ1種であった。

表 3-7 外来種の抽出結果

生態系被害防止外来種リスト掲載種	トウネズミモチ(1種)
外来種	アベリア、ゲッケイジュ、サンゴシトウ、シナレンギョウ、セイヨウシャクナゲ ソシンロウバイ、タイサンボク、タチバナモドキ、チョウセンレンギョウ、ハナミズキ ヒイラギモクセイ、ピラカンサ、フェニックス、ベニカナメモチ、ポーポーノキ メタセコイヤ、ユッカ、リキュウバイ(18種)

各エリアの樹木区分ごとの評価結果を表 3-8 に整理した。各樹木区分では、高木・中木は本数、低木(玉物)は株数で、低木(寄植え)は面積(m²)、低木(生垣)は延長(m)で整理している。

各エリアの評価結果を見ると、概ね影響度が「1」もしくは「0」のものが多かった。その中では御深井丸エリアの低木(生垣)は影響度「2」の延長が長く、二之丸(南)エリアの高木で影響度「3」(=トウネズミモチ)が2本みられる。

また、外堀(水堀)エリアで低木(寄植え)の影響度「2」の面積が最も大きく、天王坊エリアでは影響度「3」が高木 6 本、中木 5 本の計 11 本みられることが着目される。

表 3-8 各エリアの歴史的景観にふさわしくないものの調査結果

エリア名	樹木区分	エリア内の対象	影響度			
			3	2	1	0
本丸エリア	高木(本)	21	0	1	19	1
	中木(本)	20	2	2	16	0
	低木(玉物)(株)	1	0	0	0	1
	低木(寄植え)(m ²)	-	-	-	-	-
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-	-
御深井丸エリア	高木(本)	355	1	1	352	1
	中木(本)	195	2	7	183	3
	低木(玉物)(株)	17	0	1	7	9
	低木(寄植え)(m ²)	9.9	0.0	0.0	1.9	8.0
	低木(生垣)(m)	51.2	0.0	49.9	1.3	0.0
西之丸エリア	高木(本)	24	0	3	21	0
	中木(本)	4	0	1	3	0
	低木(玉物)(株)	7	0	0	0	7
	低木(寄植え)(m ²)	6.2	0.0	0.0	0.0	6.2
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-	-
二之丸(北)エリア	高木(本)	15	0	3	12	0
	中木(本)	22	0	1	18	3
	低木(玉物)(株)	74	0	2	21	51
	低木(寄植え)(m ²)	49.1	0.0	14.5	14.3	20.3
	低木(生垣)(m)	54.9	0.0	0.0	23.1	31.8
二之丸(南)エリア	高木(本)	3	2	0	1	0
	中木(本)	1	0	0	1	0
	低木(玉物)(株)	4	0	0	2	2
	低木(寄植え)(m ²)	-	-	-	-	-
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-	-
外堀(水堀)エリア	高木(本)	-	-	-	-	-
	中木(本)	-	-	-	-	-
	低木(玉物)(株)	2	0	0	0	2
	低木(寄植え)(m ²)	297.9	0.0	281.7	0.0	16.2
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-	-
外堀(空堀)エリア	高木(本)	2	0	0	2	0
	中木(本)	2	0	0	2	0
	低木(玉物)(株)	-	-	-	-	-
	低木(寄植え)(m ²)	-	-	-	-	-
	低木(生垣)(m)	35.2	0.0	0.0	0.0	35.2
天王坊エリア	高木(本)	6	6	0	0	0
	中木(本)	6	5	1	0	0
	低木(玉物)(株)	-	-	-	-	-
	低木(寄植え)(m ²)	-	-	-	-	-
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-	-

(赤字:各エリアの各樹木区分における最も多いもの、__は各影響度・樹木区分の項目で最も多いエリア)

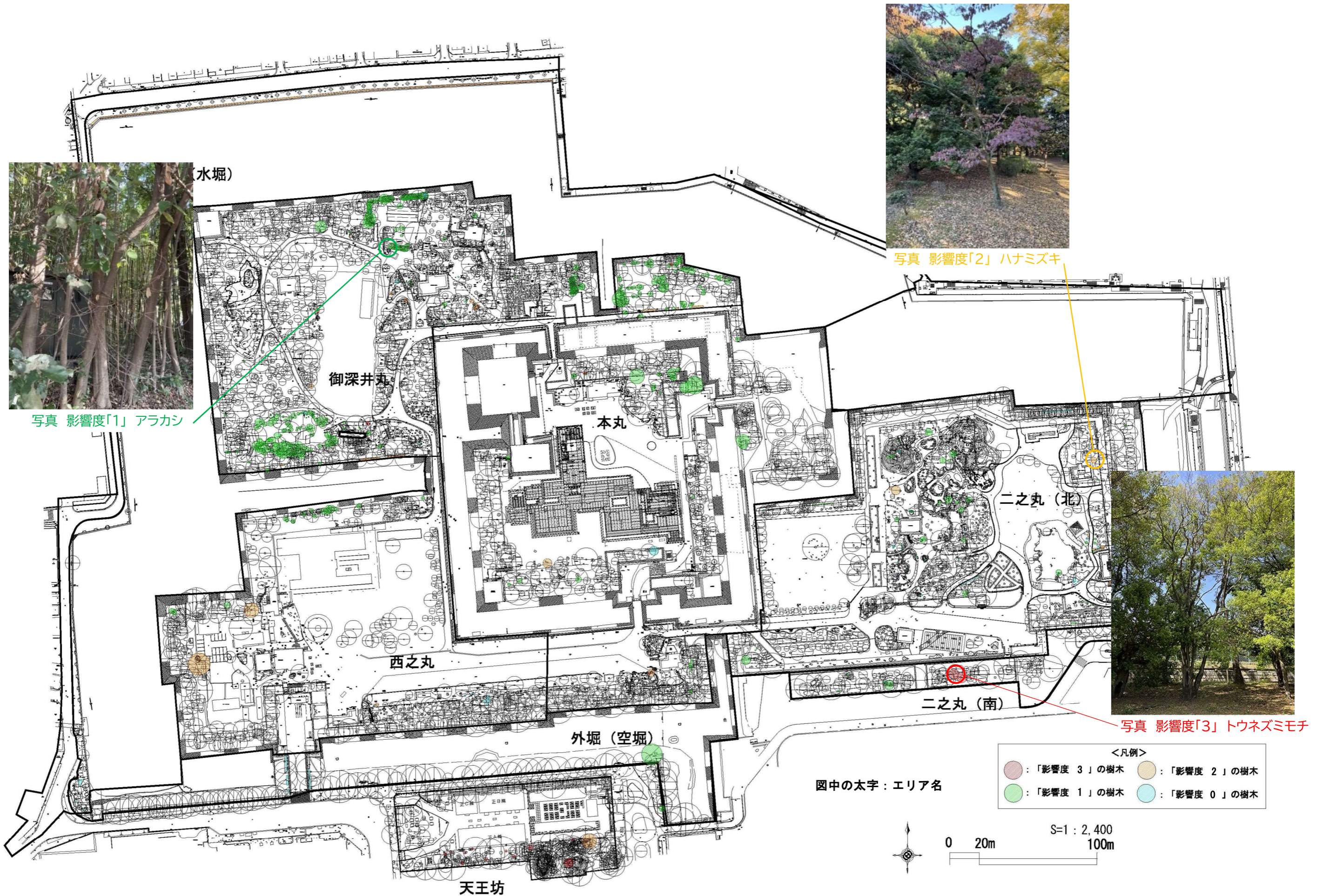


図3-3 城郭としての歴史的景観にふさわしくないものの調査 調査結果 全体平面図

3-3 城内の景観を阻害している低木の調査

1.目的

名古屋城跡の城内の景観を阻害している低木の調査を行う。

2.調査範囲

既存樹木と立枯れを対象とし、城内の主要な動線から視認可能な低木植栽を対象とする。

(1)測定する項目

・抜け・枯れの状況(判断基準は下図参照、抜けと枯れを区分して表記)

3.調査結果の整理方法

来場者から見て、景観阻害と感じられる低木(玉物・寄植え・生垣)の影響度を以下の3段階に分類する。

表 3-9 城内の景観を阻害している低木の影響度の分類表

影響度のランク	影響度
影響度:2	植栽の抜けあるいは枯れの状況が大であるもの
影響度:1	植栽の抜けあるいは枯れの状況が中であるもの
影響度:0	植栽の抜け、枯れの状況がみられないもの、または小であるもの

低木の状態表記

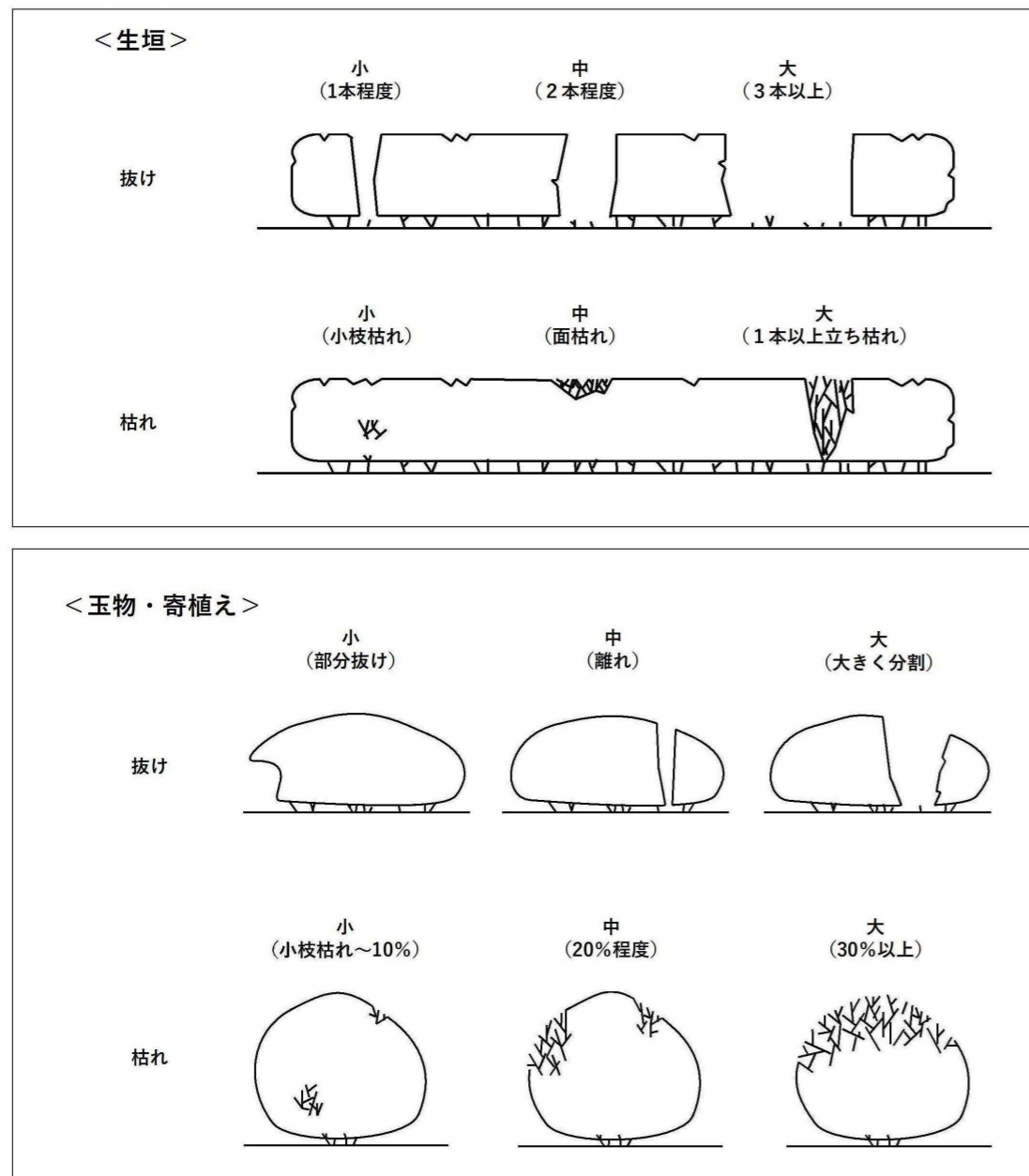


図3-4 城内の景観を阻害している低木の抜け・枯れの状況の判断基準

4.調査結果

各エリアの樹木区分ごとの評価結果を表 3-10に整理した。各樹木区分では、玉物は株数で、寄植えは面積(m²)、生垣は延長(m)で整理している。

基本的に影響度「0」の低木植栽が多かったが、本丸、御深井丸、西之丸エリアでは生垣の影響度「2」の植栽の延長が長いことが確認された。

また、二之丸(北)エリアでは、玉物、寄植え、生垣でそれぞれ影響度「0」の植栽が多かったものの、寄植えではそれぞれ、影響度「2」が約 105m²、影響度「1」が約 245m² 確認された。

なお、二之丸(南)、外堀(水堀)、天王坊の各エリアには対象となる城内の主要な動線から視認可能な低木植栽はなかった。

表 3-10 各エリアの城内の景観を阻害している低木の調査結果

エリア名	樹木区分	エリア内対象	影響度		
			2	1	0
本丸エリア	低木(玉物)(株)	141	1	1	139
	低木(寄植え)(m ²)	121.6	0.0	1.6	120.0
	低木(生垣)(m)	312.7	213.6	55.5	43.6
御深井丸エリア	低木(玉物)(株)	115	0	3	112
	低木(寄植え)(m ²)	31.0	0.0	5.3	25.7
	低木(生垣)(m)	170.0	82.3	69.9	17.8
西之丸エリア	低木(玉物)(株)	95	1	4	90
	低木(寄植え)(m ²)	65.1	0.0	0.0	65.1
	低木(生垣)(m)	143.0	105.0	0.0	38.0
二之丸(北)エリア	低木(玉物)(株)	28	2	8	18
	低木(寄植え)(m ²)	683.4	104.6	244.5	334.3
	低木(生垣)(m)	402.8	14.2	30.0	358.6
二之丸(南)エリア	低木(玉物)(株)	-	-	-	-
	低木(寄植え)(m ²)	-	-	-	-
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-
外堀(水堀)エリア	低木(玉物)(株)	-	-	-	-
	低木(寄植え)(m ²)	-	-	-	-
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-
外堀(空堀)エリア	低木(玉物)(株)	0	0	0	0
	低木(寄植え)(m ²)	0.0	0.0	0.0	0.0
	低木(生垣)(m)	12.5	0.0	0.0	12.5
天王坊エリア	低木(玉物)(株)	-	-	-	-
	低木(寄植え)(m ²)	-	-	-	-
	低木(生垣)(m)	-	-	-	-

(灰色文字:対象の低木がないエリア、赤字:各エリアの各樹木区分における最も多いもの、_は各影響度・樹木区分の項目で最も多いエリア)

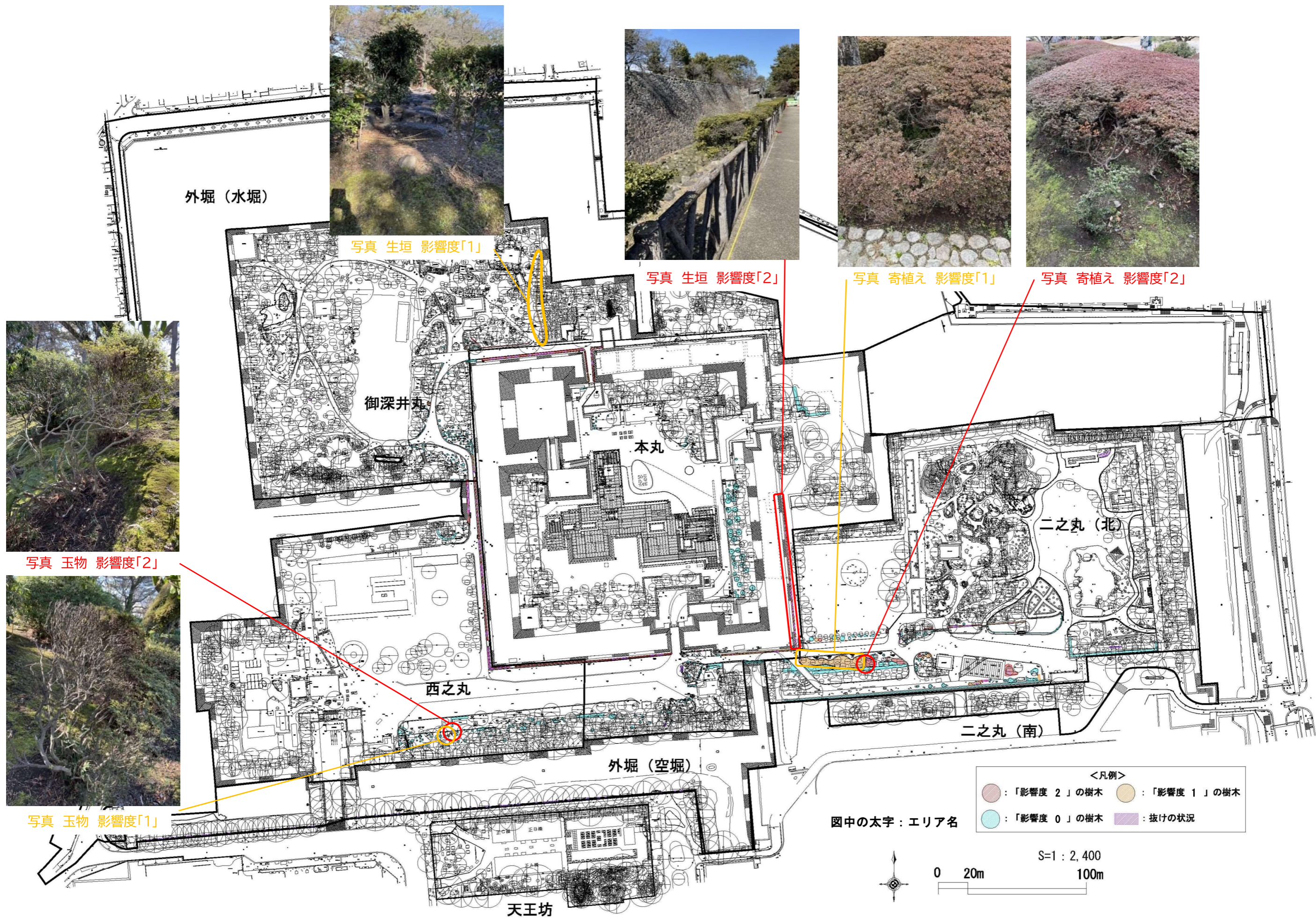


図 3-5 城内の景観を阻害している低木の調査 調査結果 全体平面図

4. 安全性が懸念されるものの調査

1. 目的

土壘法面に傾いて生育している樹木や、石垣上から園路・建物上に向かって生育している樹木など倒木や枝折れによる来場者への危険性がある樹木や、舗装や園路に段差を3cm以上生じさせている樹木を調査する。

2. 調査範囲

- ・既存樹木と立枯れ木を対象とし、園路及び園地(広場)の端から5m奥までの樹木(園路傍の土壘上の樹木等も含む)かつ、高さ5m以上の樹木(倒木した場合の危険を伴うもの、落枝・根上の危険が高まるもの)

3. 調査結果の整理方法

(1) 倒木危険度

調査は3項目とし、それぞれの判断結果を組み合わせ、4段階で評価を行うものとする。

表 4-1 倒木危険度が高いものの影響度の分類表

影響度のランク	影響度
影響度:3	危険な揺らぎがある、幹が不自然に傾き、腐朽が進んでいる等、危険度がかなり高い。
影響度:2	樹木の揺らぎはない状態は共通。それに加え腐朽・キノコの発生が多いが、傾きはない状態の樹木。もしくは腐朽・キノコの発生は少量あり、傾きがあるが正常の範囲の樹木。もしくは腐朽・キノコの発生は無いが、危険な傾きが見られるなどの樹木。危険度は中程度
影響度:1	樹木の揺らぎはない状態は共通。それに加え腐朽・キノコの発生が少量あり、傾きはない状態の樹木。もしくは腐朽・キノコの発生は無いが、傾きはあるが正常の範囲内の樹木。危険度は小
影響度:0	樹木の揺らぎや傾き、腐朽・キノコの発生などは見られず、危険度は現時点では低い。

表 4-2 倒木危険度の影響度基準

倒木危険度:影響度基準	項目3:幹の揺らぎ(無)			項目3: 幹の揺らぎ	
	項目2:腐朽・キノコの発生				
項目1:	1:無	2:少量	3:多い	有	
園路・園地への傾き	1:傾き無	影響度:0	影響度:1	影響度:2	影響度:3
	2:傾きあるが、正常な範囲	影響度:1	影響度:2	影響度:3	影響度:3
	3:危険な傾き	影響度:2	影響度:3	影響度:3	影響度:3

(2) 落枝危険度:調査は1項目とし、3段階で評価を行う。

表 4-3 落枝危険度:影響度基準

大枝(直径10cm程度以上)が園路上や建築物上にかかっているか(3段階)		
1:大枝はかかっている	2:かかっているが健全な枝	3:枯れた大枝(キノコが複数発生している枝も含む)がかかっている
影響度:0	影響度:1	影響度:2

(3) 根上危険度:調査は1項目とし、2段階で評価を行う。

表 4-4 根上危険度:影響度基準

根上り、園路への不陸の発生(2段階)	
1:3cm以下	2:3cmより大きい
影響度:0	影響度:1

4. 調査結果

(1) 倒木危険度

安全性が懸念されるものの調査対象樹木は1,291本であった。倒木危険度の調査結果は表4-5に示した通りである。エリア別に見てみると、外堀(空堀)エリアは影響度「3」の樹木が最も多く、エリア内対象本数の約5割が相当している。

西之丸エリアと外堀(水堀)エリアは影響度「2」の樹木がもっと多かった。その他のエリアは影響度「1」、もしくは「0」の本数が多かった。影響度「3」の本数が最も多いのは56本の二之丸(北)エリアであった。

表 4-5 倒木危険度の調査結果

エリア名	対象木数	影響度			
		3	2	1	0
本丸エリア	170	25	37	77	31
御深井丸エリア	520	32	63	127	298
西之丸エリア	106	29	41	31	5
二之丸(北)エリア	291	56	84	114	37
二之丸(南)エリア	28	3	8	12	5
外堀(水堀)エリア	11	1	4	3	3
外堀(空堀)エリア	84	42	28	12	2
天王坊エリア	81	5	13	20	43
合計	1,291	193	278	396	424

(赤字は各エリアで最も多い項目、__は各影響度・樹木区分の項目で最も多いエリア)

(2) 落枝危険度

落枝危険度の調査結果は表4-6に示した通りである。落枝危険度の影響度「2」は118本、「1」が347本、「0」が826本であった。エリア別に見てみると、影響度「0」の本数が多いエリアがほとんどであったが、外堀(空堀)エリアは影響度「1」の本数が最も多かった。影響度「2」の本数が多いのは68本の御深井丸エリアであり、エリア内対象本数の約13%が相当している。

表 4-6 落枝危険度の調査結果

エリア名	対象木数	影響度		
		2	1	0
本丸エリア	170	5	51	114
御深井丸エリア	520	68	86	366
西之丸エリア	106	15	43	48
二之丸(北)エリア	291	20	70	201
二之丸(南)エリア	28	2	5	21
外堀(水堀)エリア	11	1	2	8
外堀(空堀)エリア	84	5	52	27
天王坊エリア	81	2	38	41
合計	1,291	118	347	826

(赤字は各エリアで最も多い項目、__は各影響度・樹木区分の項目で最も多いエリア)

(3) 根上危険度

根上危険度の調査結果は表4-7に示した通りである。根上危険度の影響度「1」は206本、「0」が1,085本であった。エリア別にみると全てのエリアで影響度「0」の本数の方が多かった。影響度「1」の本数が多いのは137本の御深井丸エリアであり、エリア内対象本数の約26%が相当している。

表 4-7 根上危険度の調査結果

エリア名	対象木数	影響度	
		1	0
本丸エリア	170	6	164
御深井丸エリア	520	137	383
西之丸エリア	106	42	64
二之丸(北)エリア	291	14	277
二之丸(南)エリア	28	0	28
外堀(水堀)エリア	11	1	10
外堀(空堀)エリア	84	0	84
天王坊エリア	81	6	75
合計	1,291	206	1,085

(赤字は各エリアで最も多い項目、__は各影響度・樹木区分の項目で最も多いエリア)



写真 倒木危険度影響度「1」
大きく傾くが正常範囲



写真 倒木危険度影響度「3」
幹の腐朽・キノコが多い
ゆらぎあり



写真 倒木危険度影響度「2」
幹の腐朽・キノコが多い

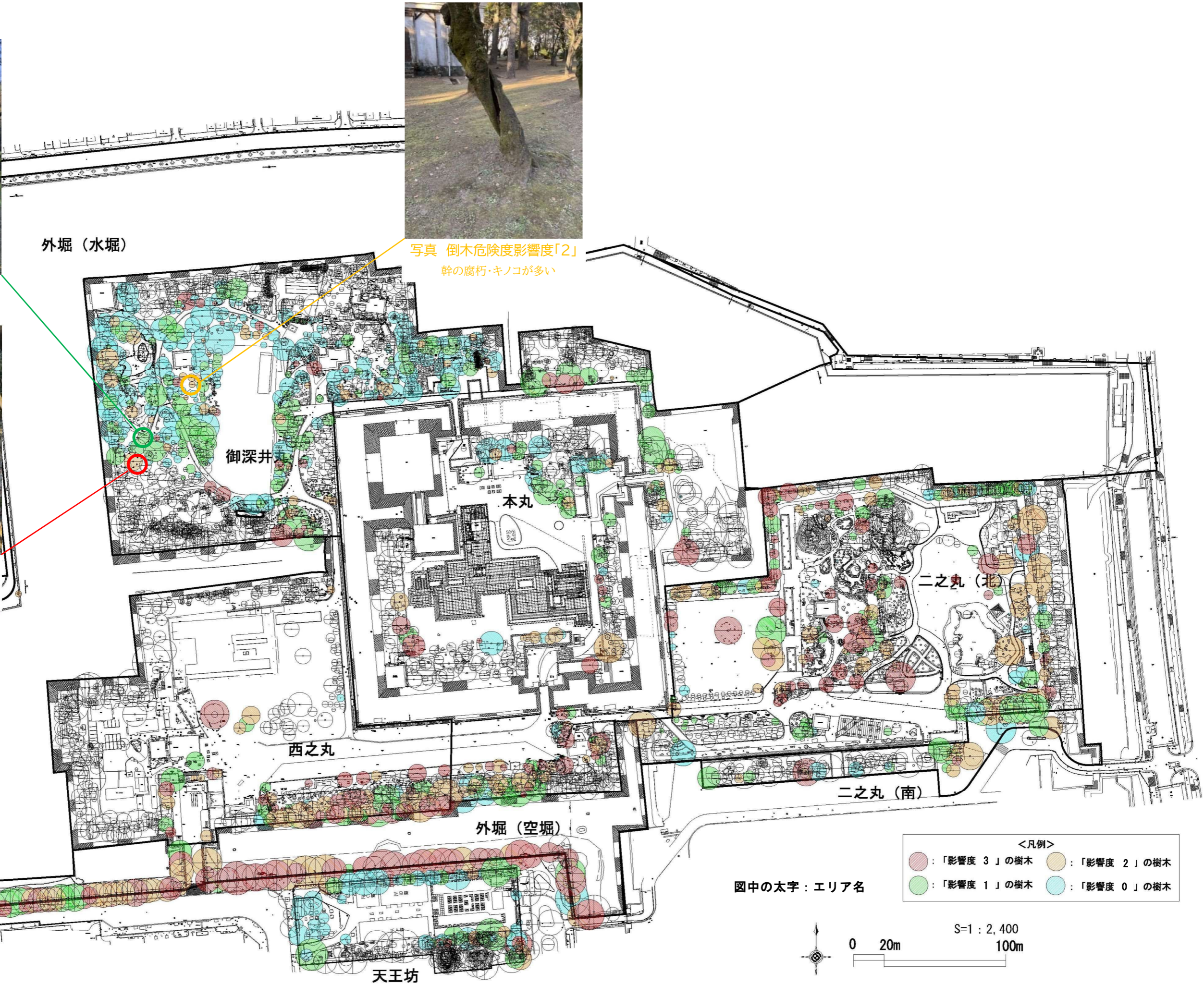


図 4-1 安全性が懸念されるものの調査 倒木危険度調査結果全体平面図



図 4-2 安全性が懸念されるものの調査 落枝危険度調査結果全体平面図



外堀（水堀）

写真 根上危険度影響度「1」
3 cm以上の根上りあり



図 4-3 安全性が懸念されるものの調査 根上危険度調査結果全体平面図

5. 四季を彩る植栽

1. 目的

四季を彩る植栽として、ウメ、サクラ、ツバキ、モミジの4種について、位置、樹種、樹高、幹周のデータを更新する。

2. 調査範囲

既存樹木と立枯れ木を対象とし、四季を彩る植栽の調査範囲は図5-1の調査範囲に示した範囲で行う。

3. 調査結果の整理方法

四季を彩る植栽として、ウメ、サクラ、ツバキ、モミジの4種について、位置、樹種、樹高、幹周のデータを更新し、台帳に四季を彩る植栽として記載する。

4. 調査結果

(1) まとめ

四季を彩る植栽の調査結果は表5-1に示した通りである。各樹木区分では、高木・中木は本数、低木(玉物)は株数で、低木(寄植え)は面積(m²)、低木(生垣)は延長(m)で整理している。

各樹木区分で見ると、高木はサクラが多く、中木はツバキが最も多かった。低木(玉物、寄植え、生垣)ではツバキのみがみられた。

表5-1 四季を彩る花木などの調査結果

樹木区分	対象	ウメ	サクラ	ツバキ	モミジ
高木(本)	1083	0	807	109	167
中木(本)	294	78	34	176	6
低木(玉物)(株)	16	0	0	16	0
低木(寄植え)(m ²)	148.1	0.0	0.0	148.1	0.0
低木(生垣)(m)	457.6	0.0	0.0	457.6	0.0

(赤字は各樹木区分で最も多い項目)

(2) エリア別

エリア別の調査結果は表5-2に示した通りである。エリア別にみると、天王坊エリアを除く、本丸、御深井丸、西之丸、二之丸(北)、二之丸(南)、外堀(水堀)、外堀(空堀)エリアは、高木のサクラの多いことが特徴である。天王坊エリアでは高木のツバキが多い。また、西之丸エリアは中木のウメが多く、本丸エリアは中木のサクラ(樹高3m未満)の本数が多い。御深井丸や二之丸(北)エリアは中木のツバキ(樹高3m未満)が多い。

植栽種ごとにみると、ウメは西之丸、二之丸(北)エリアで多く確認されており、サクラは高木、中木ともに、御深井丸エリアで多く確認されている。ツバキの高木は天王坊で、ツバキの中木及び低木(玉物、寄植え、生垣)は、特に二之丸(北)エリアで、多く確認されている。

モミジは高木、中木ともに、他エリアより二之丸(北)エリアで多く確認されている。

表5-2 各エリアの四季を彩る花木などの調査結果

エリア名	種別	対象	ウメ	サクラ	ツバキ	モミジ
本丸エリア	高木(本)	179	0	138	4	37
	中木(本)	21	0	13	7	1
	低木(玉物)(株)	—	—	—	—	—
	低木(寄植え)(m ²)	—	—	—	—	—
	低木(生垣)(m)	—	—	—	—	—
御深井丸エリア	高木(本)	364	0	312	25	27
	中木(本)	56	18	14	24	0
	低木(玉物)(株)	1	0	0	1	0
	低木(寄植え)(m ²)	7.3	0.0	0.0	7.3	0.0
	低木(生垣)(m)	—	—	—	—	—
西之丸エリア	高木(本)	180	0	142	15	23
	中木(本)	44	32	2	10	0
	低木(玉物)(株)	—	—	—	—	—
	低木(寄植え)(m ²)	—	—	—	—	—
	低木(生垣)(m)	3.5	0.0	0.0	3.5	0.0
二之丸(北)エリア	高木(本)	207	0	115	14	78
	中木(本)	159	27	4	123	5
	低木(玉物)(株)	15	0	0	15	0
	低木(寄植え)(m ²)	131.0	0.0	0.0	131.0	0.0
	低木(生垣)(m)	454.1	0.0	0.0	454.1	0.0
二之丸(南)エリア	高木(本)	8	0	6	0	2
	中木(本)	—	—	—	—	—
	低木(玉物)(株)	—	—	—	—	—
	低木(寄植え)(m ²)	—	—	—	—	—
外堀(水堀)エリア	高木(本)	1	0	1	0	0
	中木(本)	—	—	—	—	—
	低木(玉物)(株)	—	—	—	—	—
	低木(寄植え)(m ²)	7.4	0.0	0.0	7.4	0.0
外堀(空堀)エリア	高木(本)	79	0	79	0	0
	中木(本)	1	0	1	0	0
	低木(玉物)(株)	—	—	—	—	—
	低木(寄植え)(m ²)	—	—	—	—	—
天王坊エリア	高木(本)	65	0	14	51	0
	中木(本)	13	1	0	12	0
	低木(玉物)(株)	—	—	—	—	—
	低木(寄植え)(m ²)	2.3	0.0	0.0	2.3	0.0
	低木(生垣)(m)	—	—	—	—	—

(赤字は各エリアで最も多い項目、_は植栽ごと、樹木区分ごとに最も数値の大きいもの)

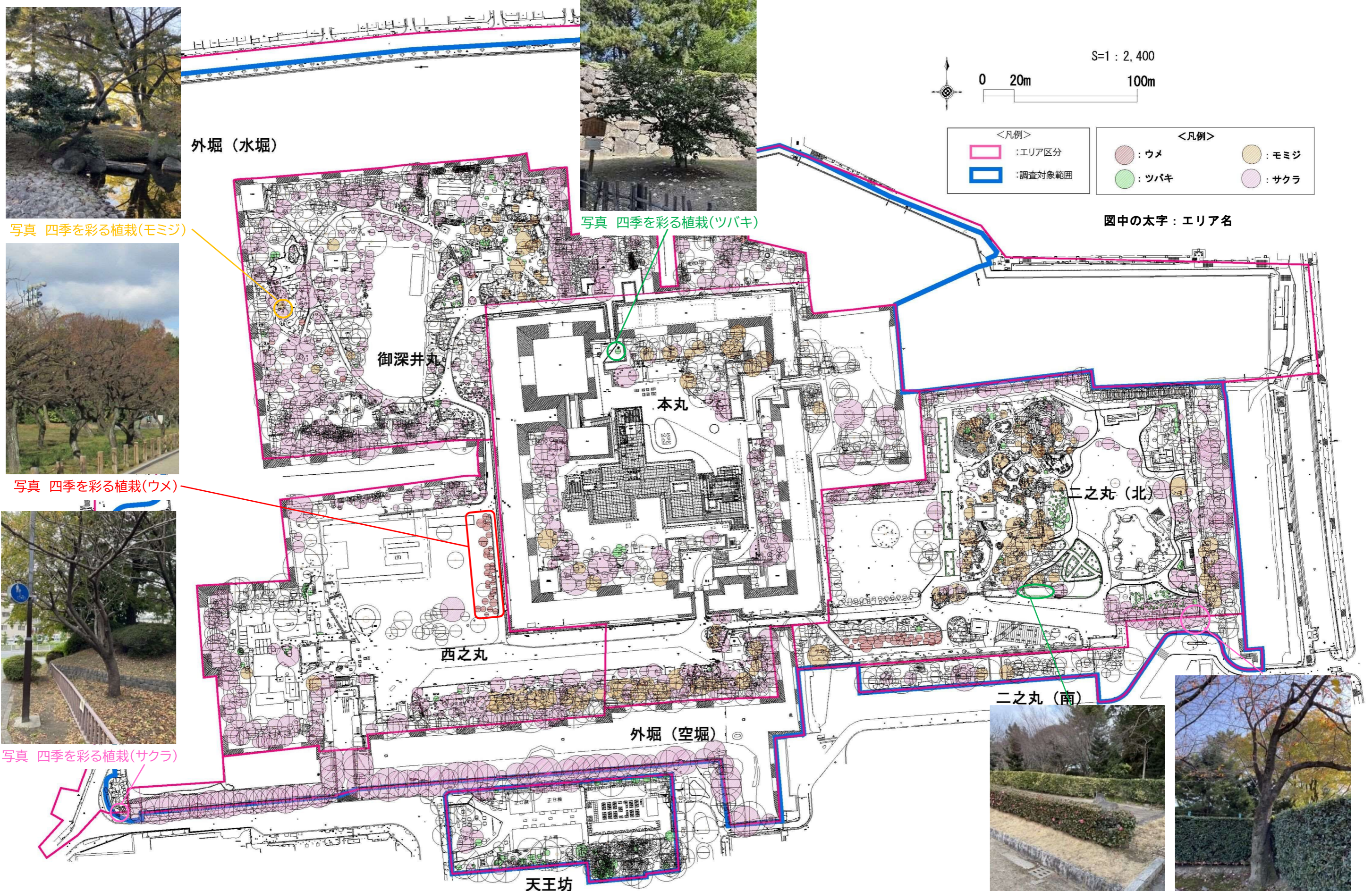


図5-1 四季を彩る植栽の調査 調査結果 全体平面図

6. 金城温古録に記載された植栽

1. 目的

「保存活用計画資料編 資料3「金城温古録」に記載された植栽について現地を確認し、位置、樹種、樹高、幹周等を調査する。

2. 調査範囲

既存樹木と立枯れ木を対象とし、「保存活用計画資料編 資料3「金城温古録」に記録された範囲で行う。なお、金城温古録に示された場所の範囲が定かではないため、対象範囲の設定方針は以下の通りとする。

- ・お堀沿い：堀の端から陸側約10mの範囲
- ・区画がある地区：区画範囲内

3. 調査結果の整理方法

金城温古録に示された調査対象範囲内(保存活用計画資料編 資料3「金城温古録」参照)に示された範囲と対象植栽を台帳と位置図から抽出し、備考欄にその旨を記録するとともに、新たにこの範囲内で対象植栽を確認した場合は、位置、樹種、樹高、幹周のデータを記録し、備考欄に記載する。

4. 調査結果

(1) まとめ

金城温古録に記載された植栽の調査結果は表6-1 に示した通りである。記録によれば、金城温古録に記載された植栽はカヤ、クロマツ、サクラ、スギ、モミジ(ヤマモミジ含む)、ウメ、エノキ、カシ、ナナカマド、ハギ、ヒメコマツ、梅林、竹藪の13種である。

今回の調査によって確認された記載植栽種はカヤ、クロマツ、サクラ、スギ、モミジ(ヤマモミジ含む)の5種であり、記録にあるウメ、エノキ、カシ、ナナカマド、ハギ、梅林、竹藪については、対象範囲内では確認されなかった。また、ヒメコマツの記載位置は、今回の調査対象範囲外であった。

対象木は高木と中木のみであり、本数の合計で259本であった。

(2) エリア別

エリア(図 1-1 参照)別にみると、対象木は御深井丸エリアでの確認が最も多く、次に二之丸(北)、西之丸、本丸エリアの順であった。御深井丸、西之丸、二之丸(北)エリアはクロマツが最も多かった。本丸エリアはサクラとクロマツがみられた。

樹種別にみると、カヤは西之丸エリアに1本のみ、クロマツは御深井丸エリアが最も多く、サクラは本丸エリアのみでみられた。スギは御深井丸エリアで最も多く、モミジは二之丸(北)エリアでみられたのみであった。

本調査において二之丸(南)、外堀(水堀)、外堀(空堀)、天王坊エリアは対象外であり、対象木の確認はなかった。

表6-1 「金城温古録」に記載された範囲にある植栽の調査結果(エリア別)

エリア名	対象木(本)	カヤ	クロマツ	サクラ	スギ	モミジ
本丸エリア	7	0	3	4	0	0
御深井丸エリア	157	0	149	0	8	0
西之丸エリア	25	1	24	0	0	0
二之丸(北)エリア	70	0	37	0	2	31
二之丸(南)エリア	-	-	-	-	-	-
外堀(水堀)エリア	-	-	-	-	-	-
外堀(空堀)エリア	-	-	-	-	-	-
天王坊エリア	-	-	-	-	-	-
合計	259	1	213	4	10	31

(灰色文字は対象の樹木がないエリア、赤字は各エリアで最も多い項目、__は植栽ごと、樹木区分ごとに最も数値の大きいもの)

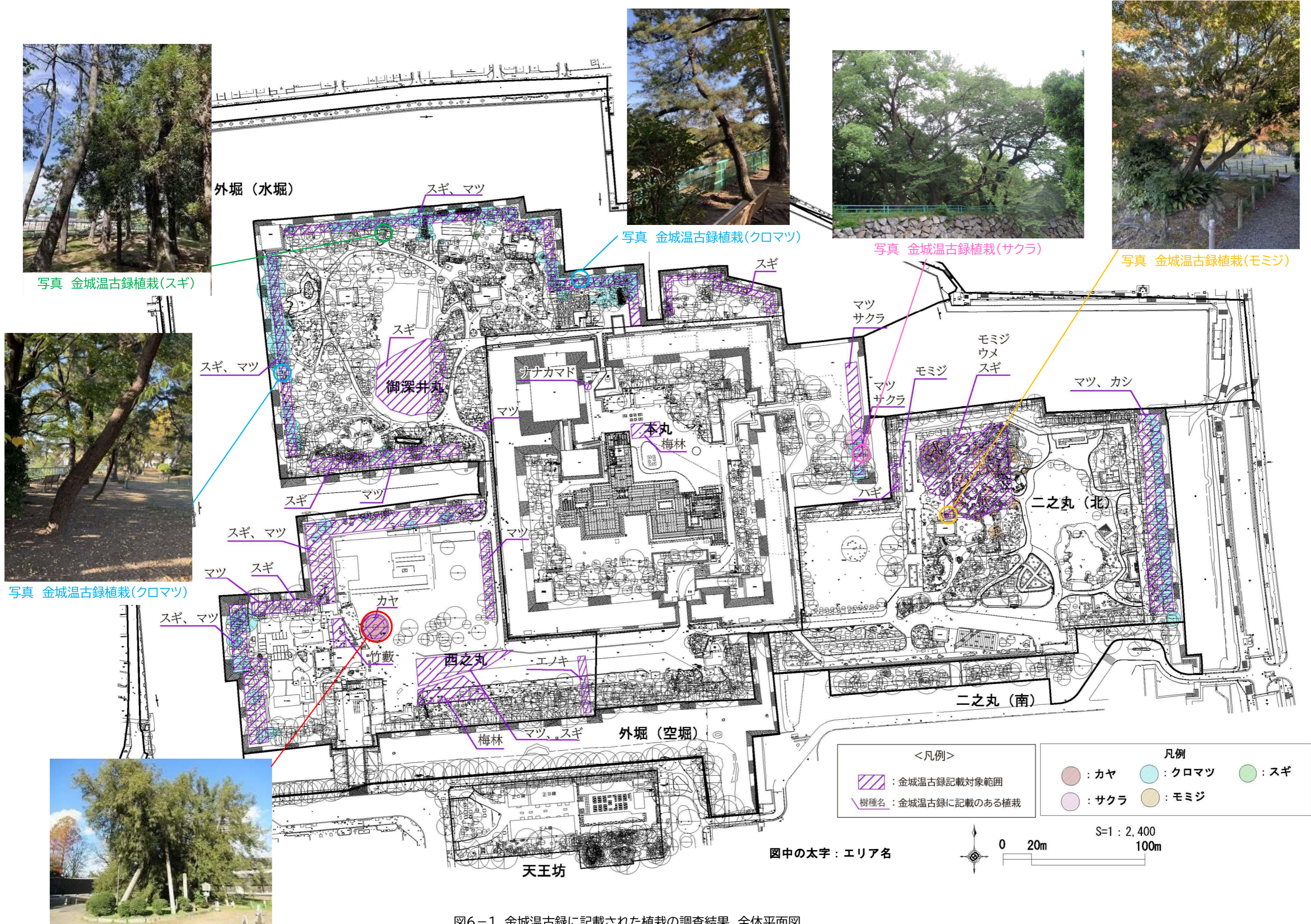


図6-1 金城温古録に記載された植栽の調査結果 全体平面図

写真 金城温古録植栽(カヤ)